

會ニ依リ本籍戸長ヲ取調^{戸主ノ子弟ニシテ}テ寄留等^{若シ分居同籍者有之ハ本管郡長ヨリ寄留地郡長ニ委嘱取調ヲ完結スヘキ}有之哉
順序ニ可有之哉

第三條 明治五年第百八拾七號公布華士族身代限規則中外入札人ト共ニ入札爲致町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札
ヲ以テ其價ヲ定ム可キ云々ト有之候處府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事令ニ報告スルヲ得ル
ノ項目即チ其第三項ニ依リ身代限ノ財産取扱之事ハ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラレ候上ハ前規則ノ町役人ハ現今之郡
長ニ於テ査定ス可キ筋ト心得可然哉

第三條 財産取調之際正當ノ事由アリテ立會ヲ要セス取調ヲ完結スル共貸主預ケ主等ヨリ其家内ニ存在スル物品ノ
中返還ヲ求ムルモ戸長ハ其處辨ヲ爲ス可キモノニ無之旨ハ會テ御指合有之候處尋常立會^{被借人}取調ニ際シ^{借主預ケ主}借主預ケ主
ニ於テ該物品ハ貸借預ケ預リ等之旨ヲ以テ相對ニテ持去ル共ハ取調ニ臨ミタル官吏ト雖モ之ヲ支ユヘキ權理無之
哉又ハ其家宅ニ臨ミタル以上ハ証據ノ有否ニ不拘持去ルヲ止メ取調ハ一旦終了シ其返還之處分ハ義キノ御指合
ニ基キ請求スル者自ラ裁判所エ可申出該下心得可然哉

指令 十七年四月五日

伺ノ趣ハ左ノ通り心得可シ

第一條 裁判所ニ於テ其子弟寄留地ノ郡區長へ照會シ取調ヲ爲サシムヘキモノトス

第二條 見込ノ通

但郡長ハ裁判所ノ認許ヲ得サレハ直ニ落札ヲ遠スルノ權ナキモノトス

第三條 後段見込ノ通

●身代限財産付立并地所建物業賣買等與書之儀ニ付大坂府ヨリ内務省へ伺^{十六年十二月二}

第一條 負債主身代限ニ際シ他人ノ田地ヲ小作スルモノアリ元米小作米ハ其土地作徳ノ幾分ヲ以テ地主ニ納ムルノ
習慣ニシテ尋常貸借トハ自カラ性質ヲ異ニスルニヨリ右身代限ノ節其地ノ立毛ハ先一番地主ニ納ムヘキ小作米

金ヲ見積ヲ以テ引去リ然ル后其餘分ヲ身代限財産取調ニ付立可然哉

第二條 前條財産付立前之ヲ引去ルヘカラサルモノトスルモ負債主財産公賣金ノ内右立毛ニ對シテハ地主ニ於テ特
ニ先取ノ權ヲ有シ候哉

第三條 借地ニ建テアル建物ヲ他へ借入質又ハ寄渡ヲ爲サントスルニ地主ニ於テ借地料延滞ヲ名トシ之カ貸地タル
ヲ証スルノ與書ヲ拒ムヲ得ヘキ哉

第四條 甲ヨリ乙へ建物ヲ借入質トシ定期限中右地所ヲ丙へ寄渡スルハ義ニ甲ヨリ乙へ差入タル證書ハ新クニ丙
ノ與書ヲ爲サシメ而シテ戸長役場ノ借入質取帳帳ニ割印ヲ爲スヘキヤ又ハ假令丙ニ於テ新クニ與書ヲ爲サハルモ
最前甲ヨリ乙へ差入タル證書ハ丙ノ與書ヲシタルト同一ノ効力ヲ有スヘキ儀ニ候哉

第五條 前條若シ丙ニ於テ新クニ與印スヘキモノナル時ハ已ニ建物借入質約定期限經過スルモ尙與書スヘキ儀ニ候
哉

指令 十七年五月十日

書面伺ノ趣左ノ通り心得申

第一條 小作地ノ作物ハ身代限處分上之ヲ公賣スヘキ時期迄ニ成熟スヘキ者ニアラサレハ差押フ可カラヌ又地
主へ納ムヘキ小作米金ヲ見積ヲ以テ引去ルヘキモノニアラス

第二條 地主ハ作物ニ對シ先取權ヲ有スルモノトス

第三條 以下與書ニ就キ伺出ヘシ

●前戸主財産公賣ノ儀ニ付宮城縣ヨリ司法省へ伺^(電) 十七年五月二日
所有主死亡相續人未定ノ財産ヲ其家族ノ負債償價ノタメ公賣シ得ルヤ

指令^(電) 十七年五月八日

五月二日付伺ハ家族ノ負債償價ノ爲メ前戸主ノ財産ヲ公賣スルヲ得サル儀ト心得ヘシ

●身代限財產取調上ニ付千葉縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年四月二十六日

客年十一月二日付官報第百六號身代限財產關ノ儀ニ付佐賀縣ヨリ御省ヘ伺ノ御指令ニ身代限財產取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アルハ戸長ニ於テ直ニ警察署ニ謝シ公力ヲ要求スルヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシト有之右故障ヲ唱フルトハ此物品ハ他ヨリ借受ケタルモノニ付財產調書ニ差加ヘキモノニアラスト申出ルモノ等ヲ指シタル儀ニ候哉右ハ限令他ヨリ借受ケタルモノト申出ルモ其家屋内ニアルモノハ財產調書ニ差加ヘ裁判所ニ送付スヘキ儀ト相心得居候然ルニ前御指令ニ據レハ裁判所ノ處分ヲ求メタル上財產取調ヲナスモノハ如シ疑義決裁候ニ付此段相伺候也

指令 十七年五月二十三日

伺ノ趣他人ノ所有ニ係ル者ノ申立アル物品ト雖モ之ヲ財產調書ニ記入シ且ツ其申立アル旨ヲ附記シテ裁判所ニ送付シ該物品ノ處分ヲ求ム可キ儀ト心得ヘシ

●身代限財產ノ儀ニ付札幌縣ヨリ司法省ヘ伺(電) 十七年四月二十九日

身代限財產ノ内證券印紙郵便切手等所持スル者有リ右公費ニ附スヘキヤ又ハ義務者ヨリ願ヒ出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ

指令 十七年五月二十三日

身代限財產ノ取扱ニ付四月廿九日付伺ノ證券印紙郵便紙ハ地方廳ニテ原價ト引換郵便切手ハ驛遞本分局ヘ廻シ郵便條例第三十六條第三十七條ノ處分ヲ請ヘシ

●身代限財產差押等ノ儀ニ付和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年五月八日

第五條 身代限財產差押ニ際シ本人及家族不在ノ節ハ隣佑ノ者ヲシテ立會セシメ若シ隣佑者之ヲ首セサルトキハ戸長ノミ立會セシメ其取調ヲナスモ不替候哉

第五條 身代限ノ處分ヲ受ケタル節本人職業ヲ爲ス必用ノ書類并ニ器械物品等其金額五拾圓ニ至ル迄ハ引渡スヘキ

第三條 前條ノ場合ニ於テ貸主他郡區ニ涉リ鑑定人ヲ要スルモ一時難呼寄ルハ差押人ノ見込ヲ以テ其土地相應ノ者ヲ撰ミ鑑定爲候候モ不替候哉

指令 十七年五月二十六日

伺ノ趣ハ左ノ通

第一條 郡長又ハ戸長ニ於テ直チニ取調ヲナス可キモノトス但調書ニハ本人等立會ヲ拒ミタルニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

第二條 明治九年當省甲第五號布達第拾三條ニ據リ身代限者ノ負擔タルヘシ

第三條 明治五年第百八拾七號公布身代限規則ニ依ル可キモノトス

●身代限財產處分ノ儀ニ付岡山縣ヨリ工部省ヘ伺 十七年五月二十六日

身代限財產處分ノ義ハ府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事縣令ニ報告スルヲ得ルノ項目即チ其第三項ニ依リ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラル、而已ナラス明治五年第百八拾七號公布身代限規則中最後ノ項目但借結文ノ趣ニ依リ調書代價相當ト見込ムルハ直ニ落札ノ義ヲ達スルハ蓋ヨリ郡長ノ權内ト心得居申候處本年四月官報第貳百貳拾九號伺指令欄内福島縣例第二條御指令ノ趣ニ依レハ身代限抵償トシテ差押ヘカラサル品類ハ郡長ニ於テ直ニ査定シ囉賣落札處方ハ裁判所ノ認許ヲ得ルノ手續キ御明示有之當縣從來ノ見解ト異リ候ニ付尙ホ彼是熟考候處抑身代限財產處分ノ義ハ既ニ郡區長ノ事務ニ屬シ況ヤ前陳ノ公布身代限規則中最後ノ項目但借結文等意味スルニ裁判官ノ認許ヲ得サレハ郡長ニ於テ直ニ落札ノ義ヲ達スルノ權ナキモノトノ精神含蓄セリトモ解シカタク且ツ本人ノ望ニ任セ差押ノベカラサル品類ハ郡長ニ於テ査定シ落札處方ノ照ハ裁判所ノ認許ヲ得ルハ聊權衡ヲ得ケル様被存加之ス囉賣ノ義ハ貸主債主雙方ヨリ鑑定人差出シ他人ト共ニ入札シ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムル規則ノアル以

上尚水裁判所ノ認許ヲ得ルハ聊相感候候至爲何分之御明示相成度此段相伺候也

指令 十七年六月十二日

伺ノ越府縣官職制ニ身代限財產取扱ノ事トアルハ其財產ノ取扱ヲ爲スニ示サレタルモノニシテ其處分権ヲ與ヘラレタルニ非ス又身代限規則未段但書ハ入札中ノ高札ヲ以テ其財產即物件ノ價ヲ定ム可キヲ示サレタルモノニシテ該物件公賣ノ處分即落札ヲ直達スヘキ權ヲ與ヘラレタルニ非ス依テ落札ノ儀ハ裁判所ノ認許ヲ得タル上相達ス可キ筋ト可心得事

但福島縣伺ニ對シ郡長ニ於テ抵償トシテ差押フヘカラサル品類ヲ査定スヘキ手續ヲ指示シタル儀ハ無之候事

●郡區長職權內身代限財產取扱ノ義ニ付和歌山縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年五月二十八日

身代限財產差押ノ儀ハ該家所有物ニ限リ他人ノ財產ニ及ホスヘキモノニ無之處其差押ニ際シ該家中ニ有之財產ノ内他ヨリ借リ品若クハ預リ品有之申實相違無之時ハ差押ニ及ハサル儀ト存候處官報第二百廿九號伺指令欄內福島縣伺第三條ヘ司法省指令ノ趣ニ據レハ證據ノ有無ニ拘差押フヘキ旨ニ有之右ハ其證據ノ不充分ナル場合ニ於テハ都テ差押確證入有之モノハ其家及ヒ建具ハ差押ヘサルノ類 有之双方貸主 異議無之モノハ差押ニ及ハサル哉將タ確證アルモ尚可差押モノトセハ一應郡區長ヨリ裁判所ヘ照會シ認可ヲ得テ其確證アルモノハ之ヲ除クヘキ儀ニシテ其貸又ハ預ケ人ヨリ其取戻シヲ裁判所ヘ直ニ可申出筋無之儀ト相心得可然哉此段相伺候也

指令 十七年六月二十日

伺ノ越公証記名若クハ賣買渡規則アル財產ニシテ他人ニ屬スルモノヲ除クノ外總テ差押フヘキモノトス但差押ヘラレタル物件ノ返還ヲ求ムルニハ其請求者自カラ裁判所ニ申出ヘキ義ト心得ヘシ

●寺院身代限之儀ニ付山梨縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年六月二十四日

寺院ニ於テ其寺院用ノ爲メ金穀ヲ負債シ期限ニ到ルモ返償ナラス迄ニ訴訟ノ末身代限被申付タリ然ルニ寺院身代限財產取調方ハ是迄類例モ無之候得共明治六年第八拾八號公布僧侶身代限規則ヲ適用調査候儀ト心得可然哉

若シ神社ニ於テ前項ノ場合ニ遭遇スルモ其財產ハ何等ノ手續ニ據リ調査スヘキ儀ニ候哉

指令 十七年七月九日

伺ノ越社寺身代限ニ付財產取調ノ手續ハ通常ノ規則ニ遵ス可ク其抵償トシテ差押フ可ラサル物件ハ左ノ通り心得可シ

- 一 神佛偶像及ヒ其附屬物
- 二 社寺付除稅地
- 三 寶物古文書類

但別段ノ由緒アル地所建物ハ本文ニ準ス

四 特別ノ契約アル寄附物

五 祭祀法用ニ必用ナル建物及ヒ什物

●身代限地所公賣ノ儀ニ付静岡縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年七月廿六日

第一條 身代限地所公賣ノ際之ニ成立スル所ノ作物ニシテ其既ニ成熟スルモノハ地所ト各別ニ公賣スヘキ儀ニ候哉

第二條 前條若シ未成熟ナルモノハ地所ヲ公賣スレハ隨テ作物ハ之ニ附帶スヘキ儀ニ候哉

指令 十七年八月十三日

伺ノ趣ハ左ノ通り

第一條 別段ノ例規無之ニ付適宜處分スヘキモノトス

第二條 公賣スヘキ時期迄ニ成熟ス可キ作物ニアラサレハ差押フヘキモノニ非ラストス

●賠償金取扱方手續ノ儀ニ付福島縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年五月廿八日

第壹條 戶長役場ニ於テ人民ヨリ徵收シタル租稅金ノ内盜難及村吏私借引負等ニ係ル分賠償方當時其筋ヘ及起訴置後日犯人處刑該金員納付スヘキ旨官管相成候モ本人資力無之方又ハ等閑ニシテ不致上納片ハ其筋ヘ對シ身代限ノ

處分ヲ請求スヘキハ勿論ニ可有之使得其該處分ノ上價額金額ニ不足ヲ生スルハ身代持直次第可致上納旨之證據
差出サセ追テ徵收候儀ニ可有之哉

第二條 前條身代限處分之際ト雖モ先取ノ特權ヲ有スル儀ト相心得可然哉
指令 十七年八月二十日

何ノ趣左ノ通心得申

第一條 賠償金ノ不足ハ裁判所ヨリ明治八年第百貳號布告證文其書體形ニ準シ身代持直次第皆濟ヲ受クヘキ
旨ノ書面ヲ渡ス可キニ付追テ其書面ニ依リ還納ヲ受ク可キ儀ト心得ヘシ

第二條 先取ノ特權ナキモノト心得ヘシ

●戶主身代限財產賣之儀ニ付愛媛縣ヨリ司法省ヘ伺 十八年一月十九日

戶主身代限之節ハ土地建物并ニ記名アル公債證書ヲ除キ非戶主ノ所有ニ係ル動產物ハ總テ戶主財產ニ組込歸屬相成
例規ニ有之候得共其内非戶主ノ所有タルノ明確ナル分取除クヘキ儀ニ候哉

前項若シ否ストナストキハ非戶主ガ篤行奇特ノ行爲ニ據リ賜リタル金銀木杯等ハ如何處分致可然哉

指令 十八年二月十八日

何ノ趣左ノ通心得可シ

但主替ニ付置者ヨリ指令ス

第一項 公債證書地所ノ如キ成法上所有者ノ記名アルモノニ非サレハ取除ク可キ限リニアラス

第三項 賞賜ニ係ル金銀木杯等ハ差押フ可キ限リニアラス

第一百八十一 訴訟入費償却規則 明治九年四月二十二日 司法省甲第五號布達

訴訟入費償却規則左之通改正候條此旨布達候事

十七年司法省
甲第五號告示

ソ以テ書類
ノ方及認
井認認ノ
ヲ示ス
七十六

第一條

訴訟並其外書類認料

一枚十六行十五字詰ニ付
十錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被告雙方往復ノ文書

第二條 十二年同省甲第二號布達ニ依リ(引合人)ノ
下(送添人)ノ三字ヲ削ル第三條四條皆同シ

證人並ニ引合人手當

一日ニ付五十錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 九年同省甲第六號ヲ以テ追テ違
スル迄施行ニ不及昔ヲ布達ス

證人並引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五十錢

第四條

證人並引合人旅費

滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

第十六類 訴訟

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノ、爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當

一日ニ付五十錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條同上

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五十錢

第七條

原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條

通辯雇料

右定限

一日ニ付二圓

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算ス可シ

第九條

翻譯料

右定限

一枚ニ付十六行十五字詰
二圓但シ一枚以下モ同價

第一條ニ同シ

第十條

測量繪圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ

第二 長六百間迄

第三 長千二百間迄

西ノ内一枚ニ付十錢

同 十二錢

同 十四錢

- 第四 長六千間迄
百間ニ付二寸ノ割 同 十七錢
 - 第五 長一萬二千間迄
百間ニ付一寸ノ割 同 二十錢
 - 第六 長一萬二千間以上
百間ニ付五分ノ割 同 廿四錢
- 一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間敷ノ長短ヲ論セス大凡見習ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ
但西ノ内一枚ニ付十錢
- 第十一條
使賃
但シ歸路モ同斷
滿一里毎二十錢一里未滿ハ五錢

- 第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣ハシタル使賃
- 第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者モノ掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃
- 第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ賣ムル使賃
- 第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ

臨時ニ遣シタル使賃
第十二條

郵便並ニ電信料
右定限

定價

第十一條ニ同シ
第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ役場ニ納ム可キ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費ハ臨時計算ヲ以テ定ム
右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

○訴訟入費規則ハ外國人ヘハ施行セス
明治十一年一月七日
明治九年四月甲第五號ヲ以テ既入費償却規則及布達置候處右ハ爾後各國公使ヘ談判ノ次第有之ニ付當分外國人民ヘハ施行雖相成候條此旨可相心得候事

但各國之内已ニ該規則之通進行致シ來候分ハ此限ニアラス
○裁判費訴訟費負擔方
明治十二年三月十四日
明治十二年三月十四日
裁判費訴訟費ノ後ニ付別紙ノ通大審院ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

別紙
大審院ヘ達
明治十二年三月十三日
裁判費訴訟費ノ後及答候條處右ハ取消シ別紙ノ通更ニ相達候事

第十六類 訴訟

別紙

(括弧内朱書)

〔第一例〕

初告ニテ 原告甲勝 (シ) 入費ヲ拂フ
 被告乙負
 控訴ニテ 原告乙勝 (甲) ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ
 被告甲負
 (破毀) 上告ニテ 原告甲負 (甲) ハ總テノ入費ヲ拂フ
 被告乙勝

〔第二例〕

初告ニテ (甲) 勝或ハ負トモ
 (乙) 負或ハ勝トモ
 控訴ニテ (甲) 負 (甲) ハ初告控訴ノ入費ヲ拂フ
 (乙) 勝 (乙) ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マデノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返ヌヘシ
 (破毀) 上告ニテ (乙) 負 (乙) ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マデノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返ヌヘシ

〔第三例〕 此例ハ大審院ニ於テ破毀シタル後第

此時負者ハ初告ト第一控訴ト第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フヘシ上告入費ニ至テハ其ノ上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者ハ之ヲ拂フヘキニ非ス

○訴訟入費辨償言渡方 明治十二年十一月二十一日 司法省丁第貳拾八號大審院諸裁判所へ達

訴訟入費云々ノ義十一年丁第四拾四號ヲ以テ相違置候處左ノ通改違候條此旨可心得申

○民事詞訟上喚出狀送達方及送達入費取立方 明治十三年四月十九日 司法省丁第六號大審院諸裁判所へ達

民事詞訟上喚出狀送達ノ後ハ可成丈直ニ本人へ送達スヘシ不得止戸長役場(戸長役場アラサ)ヲ經由スルハ其役場迄ノ送達費用ハ其呼出ヲ請フ者ヨリ取立ツヘシ但裁判落着ノ上曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論ナリトス
 右相違候事

丙第四號

各府縣

民事詞訟上喚出狀送達ノ義別紙ノ通大審院諸裁判所へ相違候條爲心得此段相違候事 (別紙ハ丁第六號達ニ付略之)

○民事裁判上人民呼出狀脚夫賃錢及赤貧者喚問旅費繰替又ハ官費支給ヲ禁ヌ 明治十五年三月二十二日

内務省(第貳拾號府廳)(沖繩廳) 前札帳帳室(四縣ヲ除ク)へ達
 民事裁判所ヨリ人民呼出狀脚夫ノ賃錢及赤貧者被告トナリ喚問旅費ノ繰替前郡區役所又ハ戸長役場ニ於テ繰替又ハ官費支給候向モ有之候處自今一切不相成候條此旨相違候事

●伺指令

●訴訟入費償却之儀ニ付高知縣ヨリ司法省へ伺 十七年二月廿日

訴訟入費償却規則第四條但書ニ入里ヲ越レハ毎滿一里ニ付拾錢トアルハ假令ハ裁判所ヲ距ル九里ノ地ヨリ召喚ニ應シタル片ハ更ニ一里ヨリ起算シ即チ金九拾錢ヲ給スルノ主旨ニ候哉將々滿八里ノ外ヨリ一里毎ニ金拾錢ヲ乘シ九里ハ金貳拾錢十里ハ金三拾錢ト計算スル儀ニ候哉

指令 十七年三月十二日

伺之趣后段見込ノ通

本件ニ付大審院裁判所へハ同年司法省丁第貳拾四號ヲ以テ達ス略之

第十七類 刑法

第百八十二

刑法ヲ改定ス

明治十三年七月十七日
第三拾六號布告

刑法別冊ノ通改定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事
十四年第三十六號ヲ以テ十五年
一月一日ヨリ實施ノ旨ヲ布告ス

刑法目錄

第一編 總則

第一章 法例

第二章 刑例

第一節 刑名

第二節 主刑處分

第三節 附加刑處分

第四節 徵償處分

第五節 刑期計算

第六節 假出獄

第七節 期滿免除

第八節 復權

第三章 加減例

第十七類 刑法

千二百八十七

第四章 不論罪及ヒ減輕

第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕

第二節 自首減輕

第三節 酌量減輕

第五章 再犯加重

第六章 加減順序

第七章 數罪俱發

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第二節 從犯

第九章 未遂犯罪

第十章 親屬例

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 內亂ニ關スル罪

第二節 外患ニ關スル罪

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四節 附加刑ノ執行ヲ遺ル、罪

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第六節 偽證ノ罪

- 第七節 度量衡ヲ偽造スル罪
- 第八節 身分ヲ詐稱スル罪
- 第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪
- 第五章 健康ヲ害スル罪
 - 第一節 阿片烟ニ關スル罪
 - 第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪
 - 第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪
 - 第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪
 - 第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪
 - 第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪
- 第六章 風俗ヲ害スル罪
- 第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪
- 第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪
- 第九章 官吏瀆職ノ罪
 - 第一節 官吏公益ヲ害スル罪
 - 第二節 官吏人民ニ對スル罪
 - 第三節 官吏財産ニ對スル罪

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

- 第一章 身體ニ對スル罪
 - 第一節 謀殺故殺ノ罪
 - 第二節 毆打創傷ノ罪
 - 第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪
 - 第四節 過失殺傷ノ罪
 - 第五節 自殺ニ關スル罪
 - 第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
 - 第七節 脅迫ノ罪
 - 第八節 墮胎ノ罪
 - 第九節 幼者及ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
 - 第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪
 - 第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪
 - 第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪
 - 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪
- 第二章 財産ニ對スル罪
 - 第一節 竊盜ノ罪

- 第二節 強盜ノ罪
- 第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪
- 第四節 家資分散ニ關スル罪
- 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪
- 第六節 贓物ニ關スル罪
- 第七節 放火失火ノ罪
- 第八節 決水ノ罪
- 第九節 船舶ヲ覆没スル罪
- 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四編 違警罪

刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一重罪

二輕罪

三違警罪

十四年第八十一號參看「第五ノ三項」

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ス

第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四無期徒刑

五有期徒刑

第十七類 刑法

六重懲役
七輕懲役
八重禁獄
九輕禁獄

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス
一重禁錮
二輕禁錮
三罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス
一拘留
二科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス
一剝奪公權
二停止公權
三禁治產
四監視
五罰金

十三年第十五號布告(第八) 十三條十四條及十七年第十四號布告(第九)第十條第十條參照

十四年第六十二號布告參照 [次項]

六沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ囚六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス
有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルコトヲ得

有期流刑ノ四三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス
重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス
禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル四人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾

分ヲ四人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラス

第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ一回ヲ

一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期

限ハ二年ニ過クルコトヲ得ス
若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者

十六年第三十
七號布告(第五
百八十二ノ五
項)第十七ノ五
法省丁第五十
三號達(同第十
四項)參看

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各

本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一 國民ノ特權

二 官吏ト爲ルノ權

三 勳章年金位記賞號恩給ヲ有スルノ權

四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五 兵籍ニ入ルノ權

六 裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス

七 後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

八 分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權

九 學校校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フコトヲ停止ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行フコトヲ停止ス
主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ治ムルコトヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルコトヲ得ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其指ニ就キタル日ヨリ起算ス
若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

十二年刑法省
第八十號一第
百八十二ノ六
項及十四年
同省丙第廿號
同十第廿五
年同省丙第
四號一第廿一
項參看

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ
一 法律ニ於テ禁制シタル物件
二 犯罪ノ用ニ供シタル物件
三 犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第四節 徵償處分

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレ、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カル、コトヲ得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

一犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タヌ前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ遵守シ悔改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スコトヲ得

無期徒刑ノ四ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ四ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ四ハ假出獄ヲ許サルハト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條 刑ノ執行ヲ遲レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一死刑ハ三十年

二無期徒刑ハ二十五年

三有期徒刑ハ二十年

四重懲役重禁獄ハ十五年

五輕懲役輕禁獄八十年

六禁錮罰金八七年

七拘留科料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラス

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遲レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時

ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

第六十二條 刑ノ執行ヲ遲レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨ

リ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀

ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦

狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ら監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラズ

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス

但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四重懲役

五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期流刑

三有期徒刑

四重禁獄

五輕禁獄

第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一

等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減

スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルヲ得

第七十一條 禁錮ヲ減輕シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減輕シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金

ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルヲ得

第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スル

ヲ以テ一等ト爲ス

違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルヲ得減シテ一日

以下ニ降スヲ得スコ料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルヲ得減シテ五錢以下ニ降スヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲

ス若シ減盡シタル時ハ止タ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ宥減輕

第一節 不論罪及ヒ宥減輕

第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ
出タル所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者

ハ此限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルヲ得ス

法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヲ得ス

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ

滿十六歳ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ

審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歳ニ過キサル時間之

ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歳以上二十歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減

第八十二條 瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十三條 違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ス
滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歲ニ滿サル者及ヒ瘖啞者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節 自首減輕
第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス

第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節 酌量減輕
第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タヌ所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章 再犯加重

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年内再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヲ得ス

第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラヌ各之ヲ徴收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ非常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス
第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章 加減順序

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス
一再犯加重
二者恕減輕
三自首減輕
四酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス
重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス
輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

第一百一條 違警罪ニ罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重ニキ從フ
第一百二條 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス

其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス
若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス

第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第一百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第一百六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスコトヲ得ス

第一百七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スコトヲ得ス

第一百八條 專ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス

- 一 所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止テ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス
- 二 所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第百九條 重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行ノ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止テ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第百十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第九章 未遂犯罪

第百十一條 罪ヲ犯サンコトヲ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第百十二條 罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第百十三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス
輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章 親屬例

第百十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 祖父母父母夫妻

二 子孫及ヒ其配偶者

三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者

四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者

五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七 配偶者ノ祖父母父母

八 配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ

養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ

十五年第三十
六號布告參看
〔第百二十〕

二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第一百十八條 皇旗ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期
徒刑ニ處ス

第一百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百
圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第一百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ
付ス

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第一百二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的ト爲シ内亂ヲ
起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ激唆者ハ死刑ニ處ス

二 群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流
刑ニ處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ
處ス

十五年第三十
六號布告參看
〔第二百一十〕

四 激唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕
禁錮ニ處ス

第一百二十二條 内亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者
ハ已ニ内亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第一百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ
内亂ト同ク論シ其激唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第一百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第一百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第二百一
十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第一百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ
タル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第一百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮
ニ處ス

第一百二十八條 内亂ニ乘シテ人ノ身體財產ニ對シ内亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタ
ル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背
叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞
又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路
ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

第三百十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀
シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第三百十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等
又ハ二等ヲ減ス

第三百十四條 外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ
六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視
ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪
第一節 兇徒聚衆ノ罪

十五年第三十
六號布告參行
〔第二百一
七〕

第三百十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ説諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル
者首魁及ヒ教唆者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上五圓
以下ノ罰金ニ處ス

第三百十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動
ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕
懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處
ス

第三百十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ
及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

第三百十九條 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二百二十條 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二百二十一條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ
當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上
五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十二條 暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ
第二百二十三條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加
ヘ重キニ從テ處斷ス

十五年第七十
三號布告參行
〔第二百一
八十二
ノ四項〕

第四百一十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖書又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第四百十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第四百十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第四百十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第四百十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第四百十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第四百十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ハ輕懲役ニ處ス

第四百十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第四百十九條 前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第四百十二條 他人ノ罪ヲ免カレシメンコトヲ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 附加刑ノ執行ヲ遁ルハ罪

第四百十四條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一

月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五百五十五條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第五百五十六條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第五百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得ズシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止々正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第五百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第六十條 第五百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

五年第廿八號
布告(第廿八號)
同第百八十八
二號布告(同
第三十一號布
告(第廿七號)參
看

ヌ可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハヌ之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第六十五條 瀛車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐偽ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第六十八條 第六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六十九條 第六十五條第六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ瀛車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆沒シ

十五年第五十
九號布告參看
〔第百二十八號〕
十八年第八號
布告(第百五
十號)〔第百五
十一號〕〔第百
五十二號〕〔第
百五十三號〕
十六年第五號
布告(同第三
項)參看
六年第百一號
布告參看(第
五十四)〔第
五十五〕

タル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス
第百七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪

第百七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ
一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル時
二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入りタル時
三 暴行ヲ爲シテ入りタル時
四 二人以上ニテ入りタル時
第百七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ
第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及モ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

第百七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ
第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第百七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應シタル者ハ第二百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス
第百七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故

十六年第四十六號布告參照
〔第百廿二〕

ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス
第百八十條 裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ

第百八十一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ檢査シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章 信用ヲ害スル罪

第一節 貨幣ヲ偽造スル罪

第百八十二條 內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第百八十三條 內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十四條 官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條 內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

十五年第三十六號布告參看
〔第百二十一〕
七年第九十三號布告〔第百五〕
五ノ四項及沿革要領一九〇五年第七號布告〔第百六〕
七年第十八號布告〔第百九〕
九年第九十六號布告參看〔第百三十五〕

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十六條 前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ著手セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百八十七條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ケ可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條 貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條 偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百九十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條 貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第十七類 刑法

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免
ス

第百九十三條 貨幣ヲ收受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルコトヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ
其價額ニ倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

第二節 官印ヲ偽造スル罪

第百九十四條 御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條 各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ
輕懲役ニ處ス

書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年

以下ノ重禁錮ニ處ス
第百九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影贖ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ
刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ監守者自テ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ
第百九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ
之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加
ス

第百九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二
十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ
處斷ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ
付ス

第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條 詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタ
ル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例
ニ照シ各一等ヲ加フ
其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

八年第九十五
號布告(第九百
一十一)九年第
百八號布告
(第九百十六)十
三年第四十七
號布告(第九百
十二)十六年第
四十七號布告
(第九百十五)同
年第四十八號
布告(第九百

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐僞ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百十二條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事

實ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽

證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルコトヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スコトヲ得ス

第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陷ル、ノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

以下九年第十
七號布告參看
〔第二百三十三〕

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス

人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一年以上一年以下ノ

重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一月以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スコトヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出テタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條 官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪

十三年第三十八號(第五十三號) 參看(第五十九號)

第二百五十六條 官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章 風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條 公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百五十九條 風俗ヲ害スル卍子圖書其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス

賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス

第二百六十二條 財物ヲ醜集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

十五年第廿五號布告參看
〔第三十八ノ二項〕

若シ説教又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條 埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ
第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章 官吏濫職ノ罪

第一節 官吏公益ヲ害スル罪

第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セヌ又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サハル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

十五年第三十
六號布告第六
百二十

十五年第七十
三號布告第六
百八十二ノ四
項同第四十一
省第四十一
號達參省同
十三項

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一月以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條 人ノ身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サハル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セヌシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セヌシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス
第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆

打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十二條 裁判官檢察事及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス
第二百八十三條 裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條 裁判官檢察警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金

ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢察警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾サシ被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金穀ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪
第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス
第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス
第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス
第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス
第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陥レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀故殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷テ陰陽ヲ毀敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癱疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至

ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癱篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但殺斃者ハ減等ノ限ニ在ラズ

第三百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陥レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不諭罪

第二百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第二百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十二條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第二百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第二百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ己ムコトヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス
一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時
三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

出タル時

第二百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムコトヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害己ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不諭罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第二百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第二百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱篤疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第二百二十條 人ヲ殺唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ殺唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

十五年第三十
六號布告
〔第二百二十〕

第二百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百二十三條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節 脅迫ノ罪
第二百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

毆打創傷其他暴行ヲ加ヘント脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セント脅迫シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十七條 兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第二百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第二百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

十五年第三十六號布告參看
〔第二百二十〕

第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス自ラ生活スルコト能ハサル老者疾病者ヲ遺棄シタル者亦同シ

第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寮闕無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ

第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ廢疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルコトヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコトヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第十節 幼者ヲ畧取誘拐スル罪

第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ禁重錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十三條 略取誘拐シタル幼者ナルコトヲ知テ自己ノ家屬僕婢ト爲シ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略

取誘拐セラレタル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ效ナシ

第三百四十五條 二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪

第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二年以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條 十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス

藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ癡篤疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第二百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ
第二百五十四條 配偶者アル者重子ヲ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節 誣告及ヒ誣毀ノ罪
第二百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス
第二百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第二百五十八條 惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誣毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハス左ノ例ニ照シテ處斷ス
一公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誣毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三

十五年第五十八號布告參看
第三二

十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誣毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百五十九條 死者ヲ誣毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス
第三百六十條 醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケケル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誣毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

第三百六十一條 此節ニ記載シタル誣毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第十三節 祖父母父母ニ對スル罪
第三百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シニ等ヲ加フ
第三百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誣毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シニ等ヲ加フ但癡疾ニ致シタル者ハ有期

徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セズ其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及モ不論罪ノ例ヲ用フルコトヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章 財産ニ對スル罪

第一節 竊盜ノ罪

第三百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條 兇器ヲ携帯シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條 自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人

ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條 田野ニ於テ穀類菜菓其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

禁錮ニ處ス

第三百七十三條 山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節 強盜ノ罪

第三百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

十七年第十六號布告參看
〔第八十三〕

十五年第三十六號布告參看
〔第二百二十〕

第三百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一二人以上共ニ犯シタル時

二兇器ヲ携帶シテ犯シタル時

第三百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ

論ス

第三百八十三條 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕

懲役ニ處ス

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二

年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セ

サル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル

時ハ其罪ヲ論セス

八年第六十六號布告(第三十三)九年第五十六號布告(第三十三)十年内務省甲第廿號布告(第三十三)第十一年内務省甲第廿號布告(第三十三)

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ二月

以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又

ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪

ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷

ス

第三百九十一條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ

授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十二條 物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交

付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條 他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐

欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不動産ト雖モ已ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隠シテ他人ニ賣與シ又ハ重ネテ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第三百九十四條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第六節 贓物ニ關スル罪

第三百九十九條 強竊盜ノ贓物ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一節 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七節 放火失火ノ罪

第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百四條 火ヲ放テ廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶瀛車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

其人ヲ乘載セサル船舶瀛車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條 火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財產ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條 火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣井蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財產ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分チ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節 決水ノ罪

十五年第三十
六號布告第六
百二十一

十五年第三十
六號布告第六
百二十一

第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船舶中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

同上

同上

第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十條 土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編 違警罪

第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一規則ヲ遵守セシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者
二規則ヲ遵守セシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者

五蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サハル者

七官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者

八自己ノ所有地内ニ死屍アルコトヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

九人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十一人ノ住居セサル家屋内ニ潜伏シタル者

十二定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者

十三官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

十四違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ

第二百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五目以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上

一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

一人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者

二水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦ス可キノ求メヲ受ケ傍觀シテ之ヲ肯セサル者

三不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

五人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サハル者

六路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嘍シ又ハ驚逸セシメタル者

七發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者

八狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者

九變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者

十墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者

十一神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者

十二公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上

一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

一濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

二制止ヲ肯セヌシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者

- 三夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者
- 四木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケヌ又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者
- 五瓦礫ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
- 六禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者
- 七汚穢物ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
- 八警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者
- 九醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者
- 十死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者
- 十一流言浮説ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者
- 十二妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者
- 十三私有地外へ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者
- 十四官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者
- 十五路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者
- 十六道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
- 第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
- 一官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者

- 二渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取り又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
- 三渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者
- 四路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
- 五官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
- 六溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
- 七制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
- 八官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
- 九身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
- 十他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
- 十一他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者
- 第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス
- 一橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
- 二牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横タヘ又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 三車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 四水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
- 五冰雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
- 六官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サハル者

七制止ヲ肯セヌシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 八牛馬ヲ牽キ又ハ繫クコトヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 九出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
 十通行禁止ノ標示ヲ犯シテ通行シタル者
 十一道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
 十二酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者
 十三路上ノ常燈ヲ消シタル者
 十四人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
 十五邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
 十六他人ノ田野園圃ニ於テ菜葉ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
 十七公園ノ規則ヲ犯シタル者
 十八通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
 第四百三十條 前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス

明治十四年十二月十九日
 ○刑法附則ヲ定ム 第六拾七號布告
 刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
 右奉 勅旨布告候事

十七年第九十二號
第九十九ノ二

刑法第一條參

(別冊)

刑法附則

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行スヘキコトヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ決行セシム但其期限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サズ但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニマラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

同第十五條第
十六條參照

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシ

メ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更

ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下

付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故

舊ニ接見スルコトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ

左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地

犯人住居ノ地

第九條 流徒ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待

テ發給ソシテ護送ス可シ

第十條 徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ

受ケヘシ

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招

キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スコトヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監

督ヲ受ケシム若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルコトヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地

ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

同第二十條第
廿一條參看
同第十七條第
十八條第十九
條參看

同第二十條參
看

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與

セス
第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ
從テ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セ
ス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行
狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近
ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ
期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送
スヘシ十五年第四拾貳號布
告ヲ以テ全條改正

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名
宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條 同上布告ヲ
以テ削除ス

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限

同上第三十七
條參看

定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故ア
リテ淹滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從テ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監
視ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク
可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届
出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察
所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條 監視ノ期間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所
ニ通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滯留スル時

十六年第六十二號
〔第四十五ノ四項〕

日ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ
 犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納スヘシ
 第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滞シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ証書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ
 第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ
 第三十三條 懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ
 第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付スヘキ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付スヘキ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ
 第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ
 第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悔改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得
 第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

九條ノ例ニ從フ可シ

第二章 假出獄及ヒ特別監視

第二十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ
 第二十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下附ス可シ
 第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
 一 本人ノ屬籍氏名年齢住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月日
 二 殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事
 三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事
 四 假出獄中更ニ重罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事
 第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財產ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ
 第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ附本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ
 第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十

刑法第五十三條以下參看
十四年第八十一號
一號公達監獄則第二編第四十條參看〔第四十五〕

九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四 往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期満限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ

警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑満限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲

治場ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辨人翻譯人ニ給與ス可キ日當

旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ

日當五拾錢以下

旅費一里拾錢以下

止宿料一宿貳拾五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當并ニ止宿料

ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス十六年第三拾九號布告ヲ以テ全條改正

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ

旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條 解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ

給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續

人ヨリ之ヲ徵收ス

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ輾轉シテ他人ノ

手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

刑法第四十五條以下參看

第五十五條 贓物輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルコトヲ得ス
若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムコトヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルコトヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムコトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉償ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルコトヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルコトヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

○新舊法ヲ比照スルノ例 明治十四年十二月二十八日 刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

刑法第三條參看

一	死刑	斬絞
二	無期徒刑	懲役終身
三	有期徒刑	
四	無期流刑	禁獄終身
五	有期流刑	
六	重懲役	懲役十年
七	輕懲役	懲役七年
八	重禁獄	禁獄十年
九	輕禁獄	禁獄七年
十	重禁錮	懲役十一年以上 禁獄錮錮十一年以上
十一	輕禁錮	懲役五年以下 禁獄錮錮五年以下

十二 罰金

贖罪收贖罰金料

十三 拘留

懲役二箇以上罰金料

十四 科料

贖罪收贖罰金料

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期内ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルコトヲ

得ス舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法

ニ從フ舊法ニ於テ禁錮三十日ニ該ル者新法ニ照ラシ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁錮三十日ニ處スルノ類

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ

過ルコトヲ得ス舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照ラシ三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

第四條 舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金料ノ金額新法主刑ノ金額内ニ在ル時ハ新法ニ從フ

但舊法ノ金額ニ過クルコトヲ得ス

第五條 舊法新法ノ罰金料共ニ多數寡數アル者ハ其寡數ノ寡キ者ニ從フ但其多數ノ寡

キ者ニ過クルコトヲ得ス

第六條 舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加ス可キ時ハ其罰金ヲ附加セス

第七條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金料ニ該ル時ハ新法ニ從フ

第八條 舊法ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル時ハ舊法ニ從フ

第九條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用

セス但除族追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス

第十一條 華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セス

第十二條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

第十三條 舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

右奉 勅旨布告候事

○憲兵卒ノ職務ニ關スル犯罪處斷例 明治十五年十二月二十八日

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

右奉 勅旨布告候事

○陸海軍法衙ニ於テ罰金料ニ處スル時換刑方 明治十六年十一月十日

陸海軍法衙ニ於テ罰金料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

刑法第三百三十九條及第二百七十六條參看

刑法第二百二十七條參看

刑法第四十三條參看

○偽證又ハ贋造文書沒收方等 明治十二年七月二十七日 司法省丙第拾號大審院諸裁判所檢事檢事アラサル府縣へ達
凡ソ偽證或ハ公私文書ノ贋造ニ係ル一發覺シ刑事裁判ヲ經シ上ハ其文書ハ焚ヨリ其裁判所ニ没入シ置クヘシト雖正或
ハ其文書ノ證憑ナキヲ以テ他ニ詞訟ヲ起スヘキ途方ヲ失ヒ宛在者ナキヲ保シ難シ故ニ其文書ヲ没入スルニ當リ其文書
ノ寫ヲ請求スル者ニハ必ス之ヲ與フヘシ

但裁判所ニ於テ該書類ニ消印ヲ押捺スル如キノ慣習ハ廢止トス

各裁判所ニ於テハ前條文書ノ寫ヲ以テ取出ルモノアラハ尋常ノ証據ト見ルハ勿論ト雖モ若他ノ裁判ニ在リテハ一應其
没入セシ所ノ裁判所へ照會シテ其没入セシハ果シテ信ナルヤヲ認メシ上裁判ヲ與フヘシ

右相違候事

○各地方便宜ニ從ヒ違警罪ヲ定メ發行シタル片主務省ニ届出方 明治十四年八月三十一日
第七拾七號警視廳府縣(東京府ヲ
除ク)

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省へ届出ヘシ此旨相違候事

○死刑者犯由牌揭示式ヲ改正ス 明治十五年二月六日 司法省丙第三號裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ達

處刑ノ者犯由揭示ノ儀ニ付明治七年五月當省第九號ヲ以テ相違置候旨モ有之候處今般新刑罰法實施ニ付テハ明治十四年二
月第六拾七號公布刑罰則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相違候事

一死刑ノ執行アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ輪形ニ據リ公告案ヲ製シ三日間該廳門前ニ揭示シ且別ニ宣告
書ノ謄本ヲ製シ犯罪ノ地并犯人住居ノ地方(東京ハ)府縣へ速ニ送達スヘシ

一警視廳府縣ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ謄本送達アレハ左ノ輪形ニ據リ犯罪ノ地并犯人住居ノ地何レ
モ三日間通衢ニ榜示公告スヘシ

死刑宣告榜示公告輪形

死刑宣告榜示公告輪形

重罪裁判所門前榜示

犯罪ノ地又ハ犯人住居ノ地榜示

用紙堅質ノ品ヲ撰ス

宣告書全文ヲ掲ク	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

宣告書全文	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
警視廳監名	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃
又ハ府縣長官名	〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

右之通宣告相成候ニ付公告スルモノ也

○刑法附則中監視表旅券書式ヲ定ム 明治十五年三月二十二日 內務省乙第拾九號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ達

刑法附則中監視表旅券共別紙書式之通相定候條各廳ニ於テ調製シ下附スヘシ此旨相違候事

但紙質堅緻ナルモノヲ用ユヘシ (別紙略之)

十五年內務省
乙第拾九號
旅券書式
第三項ノ但書
第四項ノ但書
ハ特別監視ニ

附セラレタル者ニ限リ押入レテ監視票并ニ旅券ニ警察署トアルハ分署モ包含ス

刑法第四百三十三條

同上

刑法第二百七十六條以下

○軍人制服ヲ着用乘馬シタル者ハ刑法第四百貳拾七條第三項ノ限ニ無之 明治十五年四月二十

○犯人制服用ヲ着用乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相違候事 明治十五年五月十一日

○犯罪ノ用ニ供シ及犯罪ニ因テ得タル物件所有主ニ還付方 明治十五年五月十一日

○犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四百三十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所々在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間ヨリ起算スニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相違候事

○陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタルハ處斷方 明治十五年八月二十一日

○陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタルハ處斷方 明治十五年八月二十一日

刑法第廿七條

看

大政官選 明治十五年八月十五日

陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ都テ官吏ニ準シ候儀ト可心得此旨相違候事

○罰金ヲ禁錮ニ換フルノ手續 明治十七年十月十日

○罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙甲號ノ通旨出候ニ付乙號ノ通旨及指令候條爲心得此旨相違候事 (別紙) 甲號

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付旨

重罪裁判ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者期限内ニ納完セサル時ハ刑法第廿七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所閉廳後ハ始テ刑罰所ニ於テ右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求ニ因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候條致度右ハ違掛リ候事伴有之候旨至急御指令相成度此段相伺候也

明治十五年九月十八日

司法卿大木喬任殿

神奈川重罪裁判所

判事荒木博臣印

乙號

伺ノ通

明治十五年九月廿六日

○監視ニ附セラレタル者他ノ地方旅行ノ取計方 明治十七年三月二十六日

第十七類 刑法

千三百七十九

但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄内ニ捺印スヘシ

○監視假免假出獄上申方 明治十七年七月九日
内務司法兩省七第三拾三號監視廳府廳(東京府ヲ除ク)へ送
刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其事實ヲ具申直ニ上申致來候處自今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心
得ヘシ此旨相達候事

●同指令

●刑期計算方ノ儀ニ付京都府ヨリ司法省へ伺 十六年六月廿一日

茲ニ一人ノ未決監ニ收監セラレ審理中餘罪發シテ又收監狀ヲ發セラルヘモノアリ而シテ第一ノ所爲ニ對シ刑ノ旨渡
ヲナシ數日ヲ經テ第二ノ所爲ニ對シ放免ノ旨渡ヲナシ又ハ刑ノ旨渡シヲナスモノアリ此場合ニ於テハ未決監ニ收監
中ト雖モ第一ノ刑期ハ刑法第五十一條ノ通計算シ可然哉前顯果シテ伺ノ通ナルハ已決囚ニシテ除罪發シテ未決監
ニ收監セララルヘハ其餘罪ノ罪トナルト否トヲ論セス其日數ハ刑期ニ算入スル途ト心得可然哉差係リタル義有之候
條至急伺分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令 伺之通 十六年六月三十日

●囚人放免時日過誤之者處分之儀ニ付青森縣ヨリ司法省へ伺 十六年六月廿八日

刑法第二百七十九條ニ司獄官更程式規則ヲ遵守セシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシムヘキノ時ニ至リ之ヲ
放免セサル者ハ云々トアルハ即チ故意擅行ニ出ツルモノニ限ルハ勿論ナリト雖モ若シ故意擅行ニ非スレテ放免スヘ
キ時日ヲ誤算スル者ハ本廳長官ニ於テ懲戒例ニ據リ處分スルニ止マリ刑法ニ於テ論スルノ限リニアラサル儀ト心得
可然哉此段相伺候也

指令 伺之通 十六年七月十三日

●監視執行疑義ノ廉ニ付長野縣ヨリ司法省へ伺 明治十六年七月四日

刑法附則第三章第三拾貳條ニ據リ監獄中ノ別房ニ留置シタル監視人ハ同章第二拾六條第二拾七條等ニ據リ警察官ヨ
リ監視票ヲ下附シ總テ監視執行上ニ就テハ警察署ノ管理ニ屬セシムル儀ニ候哉又ハ常ニ司獄官更ニ於テ監督致シ候
得者其儀ヲ爲スニ及ハサルモノニ候哉若シ監獄中ノ別房ニ留置シ唯ニ司獄官更ニ於テ之カ監督ヲ爲シ警察署ノ管理
ニ屬セサル場合ニ於テ逃走シタル監視人ハ監視規則違犯ノ者ト認メ可然哉右相伺候也

指令 十六年七月廿四日

伺ノ趣在監中ハ司獄官更ニ於テ監督ス可キ者トス但逃走シタル時ハ監視規則違犯者トシテ罰スル儀ト心得可シ

●人身ヲ略取誘拐シタル者之儀ニ付熊本縣ヨリ司法省へ伺 十六年七月九日

二十歳以下ノ者ヲ略取誘拐シタル者處分方ハ刑法第三百四十一條以下ニ明瞭ナリト雖ニ二十歳以上ノ者ヲ略取誘拐シ
タル者ヲ罰スルノ明文ナシ右ハ已ニ知方備ハルヲ以テ欺罔又ハ略取セラルヘモ被害者ノ自爲ト同視シテ不問ニ置カ
ルノ所以ナラン歟然リト雖ニ二十歳以上ニシテ或ハ不慮力ニシテ欺罔以テ誘拐セラルヘナキ能ハス譬ヘハ白痴ノ者ヲ
誘拐シテ力役又ハ賣淫等ノ爲ニ他人ヘ賣ルノ類如斯ハ其歳二十歳以上ト雖ニ不慮力ノ賤ヨリ見ルハ長幼ノ別ヲ以テ
論シ得サル者ノ如シト雖モ其年齡明記有之上ハ刑法第三百四十一條以下ノ各條ニ比擬處分スルヲ得サル儀ト心得可
然哉御疑義ヲ生候條至急伺分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令 十六年七月廿四日

伺ノ趣二十歳以上ノ者ニ付テハ刑法ノ問フ所ニ非ス

●生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル被告人年齢計算方ノ儀ニ付海軍省ヨリ太政官へ伺 十六年七
生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル被告人年齢計算方ノ儀萬法ニ在テハ改定律例第九十三條ニ依リ生年ヲ以テ半年ニ計算致
候得共新法ニハ右等ノ明文無之且ツ生月ヲ知ラサル者ハ其ノ六月前ニ出生セシヤ將ク七月以後ノ出生ナルヤモ知ル
ヘカラサルニ付萬法ノ如キ計算法ニシテハ被告人ニ於テ大ニ幸不幸ヲ來シ不都合ト被存候處地方法衙ニ於テハ生月
ヲ知ラサル者ハ十二月ヲ以テ生月ト爲シ計算致候由右ハ算定方總當哉ト存候條當軍衙ニ於テモ生年ヲ知テ生月ヲ知

ラサル者年齢ノ儀ハ十二月ヨリ以生月ト定メ計算致度此段相伺候也

指令 伺之通 十六年九月二十二日

●舊法受刑期限中新法實施後重罪ヲ犯セシ者假出獄之儀ニ付宮城縣ヨリ司法省ヘ伺
十六年九月廿三日

刑法第五十七條ニ曰刑期限内更ニ重罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サズトアリ然レハ舊法ニ處セラレ該刑期中新法實施後ニ至リ重罪ヲ犯セシ者モ亦假出獄ヲ許ルサハル儀ニ可有之哉將タ許スコトヲ得ヘキ哉若シ是レヲ許スモノトセハ其刑期四分ノ三計算方ノ如キハ舊刑殘日數ト新刑ニ處セラレタル日數トヲ合算スル儀ト相心得可然哉此段相伺候也

指令 伺之趣前段見込ノ通 十六年九月八日

●刑期計算方ノ儀ニ付石川縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年九月十四日

爰ニ詐偽取財之犯罪人アリ其所在不明ニ付甲地裁判所ニ於テ八月四日缺席ノ儘重懲罰三ヶ月罰金四圓監視六月ヲ曾渡サレタリ然ルニ本犯ハ乙地ニ於テ毆擊創傷ノ事件ニ付七月廿五日同地監獄署ニ勾禁セラレタル事甲地裁判所ニ相知レ八月十七日右欠席裁判官渡邊ヲ乙地ニ送致シタルニヨリ即日本犯ニ告示シタリ然處同月廿七日乙地裁判所ニ於テ毆擊創傷事件ト前罪詐偽取財ト二罪俱被一ノ重懲罰二年ノ刑ニ處セラレタリ右刑期計算方後判二罪ヲ併セタル處分ナルヲ以テ前判ニ不關後判曾渡ノ日ヨリ起算シ後判ノ刑ニ併テ重懲罰二年ヲ執行候儀ニ候哉然レ候儀有之候條至急御指揮被成下度此段相伺候也

指令 後段伺之通 十六年九月廿六日

●監視人取扱方ノ儀ニ付京都府ヨリ司法省ヘ伺 十六年九月十三日

甲地在籍ノ者乙地ニ於テ罪ヲ犯シ主刑滿期ノ上本人ノ申立ニ寄リ在籍地ニ於テ監視執行ノ爲メ乙地警察署ヨリ甲地警察署ヘ本犯送致セシル甲地警察署ハ監視執行ノ爲メ其住所ヲ調フルニ本犯ハ丙其附籍ナリシカ其丙其ハ曾

テ失踪シ唯戸籍ノ存在スルモ本犯在籍スヘキ家屋及ヒ引取人モ無之亦亦貧ニシテ別ニ住所ヲ定ムルハ能ハス如此場合ニ於テハ在籍地甲地ノ監獄署ヘ引渡合署ニ於テ刑法附則第三十二條ノ處分ヲ可爲儀ト相心得可然哉將乙地則主刑執行地ノ監獄署ヘ送戻シ同署ニ於テ同條ノ處分ヲ爲スヘキ儀ニ可有之哉目下差掛リ候事件有之候間至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

指令 伺ノ趣前段見解ノ通 十六年九月廿六日

●死刑之宣告ヲ受ケタル者犯由揭示之儀ニ付茨城縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年九月十二日

第一條 茲ニ死刑ノ宣告ヲ受ケタル犯人アランニ其裁判官渡ニ對シ上告ヲ爲シ該上告棄却セラレタル後死刑執行シタル時犯由ヲ榜示公告スルニハ原裁判官渡書ノ全文ヲ掲ケ(上告ニ對スル判文ハ公告セズ)明治十五年御省丙第三號御達ニ依リ揭示方取扱可然哉

第二條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者前條ノ如ク上告ヲ爲シ其上告ニ付キ原裁判官渡ノ幾分ヲ破毀セラレ死刑ヲ執行シタル時ハ原裁判官渡書及ヒ大審院判決書ノ全文ヲ掲ケ公告スル儀ト相心得可然哉

右ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタル後上告及ヒ哀訴ヲ爲シ其上訴總テ棄却セラレ已ニ裁判確定シタル者有之ニ付刑ノ執行ヲ爲シタル時ハ取扱方變換候條至急御指揮有之度此段相伺候也

指令 書面伺之通 十六年九月十八日

●犯罪ニ關スル物件處分ノ儀ニ付栃木縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年九月八日

置捨品中贓物其他犯罪ノ証憑トスヘキ物件アリ警察官ヨリ之ヲ檢甲ニ送致セシニ犯人未タ捕ニ就カスシテ公訴期間免除ノ期限ヲ經過シタルハ其物品ハ行政官ノ處分ニ屬スルモノニ候哉果シテ行政官ノ處分ニ屬スルモノトセハ前顯ノ物品ハ勿論犯罪捜査ノ爲メ檢事ニ於テ直チニ勾收シタル物件中申主不明ナルモノニシテ期間免除ノ期限ヲ過キタルモノモ檢事ヨリ警察官ヘ引渡シ相成ヘキ筋ニ之レアルヘキ哉此段相伺候候條至急御指揮ヲ仰キ候也

右指令 伺之通 十六年九月十九日

●京都始審裁判所檢事ヨリ司法省へ刑期計算ノ儀ニ付請訓 十六年九月廿六日

第一條 刑法第四十九條ニ略一年ト稱スルハ曆ニ從フトアリ右ハ平年ハ三百六十五日閏年ハ三百六十六日ヲ以テ計
算スル儀ニ有之候哉果シテ然ラハ一年ノ刑ヲ言渡サレタル者平年ト閏年ト岐リタル時ハ受刑ノ年ノ日數ニ從フ可
キヤ滿限ノ年ノ日數ニ從フ可キ哉ノ疑國ナキ能ハス何トナレハ受刑ノ年ノ日數ニ從フ時ハ例セハ平年三月五日ニ
一年ノ刑ヲ言渡サレ翌年閏年ナレハ翌年三月三日滿限トナリ閏年三月五日言渡サレタル時ハ翌年三月五日滿限六
日ニ放免スヘキモノニ相成又滿限ノ年ノ日數ニ從フトキハ平年二月十日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレ翌年閏年ナル時ハ
翌年二月十日滿限十一日放免スヘキモノニシテ初年閏年ナレハ翌年二月八日滿限ト相成刑期區々ニ涉リ不穩當ノ
様ニ有之抑右曆ニ從フトハ十二ヶ月ヲ以テ計算スル儀ニテ平年閏年ヲ論セス 當年三月五日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレ
タル者ハ翌年三月四日ヲ以テ滿限ト相心得可然哉

第二條 重懲劔一年ノ刑ヲ受ケタル者六十日役過シテ逃走シ捕ニ就キタル時ハ一年ノ日數三百六十五日ノ内ヨリ右
六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ更ニ役セシムヘキヤ將タ己ニ役過セシ日數二月ナルヲ以テ一年ノ日數十二ヶ月ノ
内ニテ二月ヲ扣除シ殘ル十ヶ月ヲ更ニ役セシム可然哉

内訓 十六年十月十三日
請訓ノ趣ハ第一條第二條其後段見込ノ通

●刑法附則ノ儀ニ付疑義愛媛縣ヨリ司法省へ伺 十六年十月十一日

茲ニ主刑滿期后監視ニ附セタル者アリ假令ハ甲警察署ニ於テ旅券ヲ附與シ丙警察署所轄即チ犯人居在地ナルヲ以
テ歸路ノ際不斗病ニ罹リ過分ノ金ヲ要シタル連テ旅費ニ欠乏スルノ懸ナリ 乙警察署所轄内ニテ滞在ノ爲メ旅金ヲ
消費シ進退如何トモスル能ハス終ニ乙署ニ出テ救助ヲ請フアルハ刑法附則第三十二條ニ準據シ監視ノ別房ニ留
置スルノ處分ヲ爲スヘキモノト思考候得共該條ニ於ケル單ニ監視者ヨリ送致ヲ受タル節其居在地へ歸習スル資金
ナキ場合ニ於テ處分スルノ法則ニテ有之候得ハ聊カ疑義ニ涉リ候條如何取扱ヒ可然哉

若シ果シテ前條ノ如ク附則第三十二條ニ準據スヘキモノトスルハ甲警察署ヨリ丙警察署則チ居在地へ送付セシ啓
類取扱ノ手續ハ如何取計ヒ可然哉

前條ノ場合ニ於テ特シ監視者無之地ナレハ附則第三十二條ニ準據スルヲ得ス右ハ如何處分シ可然哉
右ハ送付リタル儀モ有之候條悉恣何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

指令 十六年十月二十九日
伺之趣刑法附則第三十二條ニ準據シテ其所在地監視ノ別房ニ留置シ其種類ハ居在地ノ警察署ニ其事由ヲ報知シ
テ送致ヲ求ム可ク若シ其所在地ニ監視者アラサル時ハ最近ノ監視者ニ送致シテ同斷ノ手續ヲ爲ス可キモノトス

●刑期計算方之儀ニ付京都府ヨリ司法省へ伺 十六年十月廿六日

本年九月廿六日付京都府輕罪裁判所檢事請訓其第二條ニ重懲劔一年ノ刑ヲ受タルモノ六十日經過シテ逃走シ云々ニ對
シ本月十三日付請訓ノ趣ハ第一條第二條トモ後段見込之通ト内訓有之候處當府ニ於テハ刑法第四十九條ニ據リ斯ノ
如キモノハ一年ノ内ヨリ六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ執行致米候處右内訓ノ通ニテハ一年ノ刑ヲ受タルモノ六十
日經過シテ逃走スルハ其逃走スルカ爲メニ已ニ確定シタル裁判ノ刑期五日ヲ減縮スル義ニテ稍不穩當ニ被者候如
何相心得可然哉

指令 十六年十一月八日
伺ノ趣曆ニ從フトハ一年ヲ三百六十五日トスルニ非スノ曆ノ年月日ニ從ヒ計算スルヲ云フ即チ年ノ平閏ニ拘ハ
ラズ懲劔一年ニ處セラレタル者本年十一月一日ヨリ執行シタルハ明年十一月一日ニ之ヲ放免ス若シ明年一月
二日ニ逃走シ同五月一日ニ捕ニ就キタルハ明年四月卅日迄ヲ一年ト假定シ其内ヨリ前ニ執行ヲ經タル二ケ
月一日ヲ扣除シ平年ナルハ明年二月廿七日ヲ以テ滿期トス依テ京都始審裁判所檢事會根誠藏へ前訓示ノ通
心得ヘシ

●刑期計算之儀ニ付茨城縣ヨリ司法省へ伺 十六年十一月一日

刑ノ冒濫ヲ受ケタル者上告ヲ爲シタル後檢察官ヨリモ又附帶ノ上告ヲナシタリ然ニ大審院於テハ二者ノ上告棄却シタリ右刑期ハ原裁判官濫ノ日ヨリ起算シ可然哉法律ニ正條ナキヲ以テ此段相伺候也

指令 十六年十一月十日
伺ノ趣後判宣告ノ日ヨリ起算スヘシ但上告期限内檢察官ヨリ上告シタルモノニ係ル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算スル候ト心得ヘシ

●根室輕罪裁判所檢察事ヨリ司法省へ刑法第二百七十七條疑義ニ付請訓 十六年十月五日
刑法第二百七十七條身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官其報告ヲ受ケテ速ニ保藏ノ處分ヲ爲サル者ハ云々トアリ右ハ公務ノ餘暇則登樓ノ如キ場合ト雖正該報告ヲ受ケタル以上ハ無論職權ヲ以テ其保藏ノ處分ヲ爲ス可キモノト心得可然ヤ將少公務ノ餘暇ナルヲ以テ治罪法第百五條ニ依テ通常凡人ノ資格ヲ以テ其處分ヲ爲ス可キ歟

第二條右第二百七十七條ニハ治罪法第六十條警視廳警部區長郡長治安判事警部ノ在ラサル地ノ戶長等モ該條へ合當シ居ル無論ノ儀ト心得可然哉

内訓 十六年十月三十日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條 職務外ノ時間ト雖モ相當ノ處分ヲ爲スヲ得但之ヲ爲サハルモ刑法ノ間フ所ニ非ス

第二條 見解ノ通

●於三次治安裁判所廣島輕罪裁判所檢察事ヨリ司法省へ賍物處分方請訓 十六年九月十七日

刑法第四十三條同第四十八條末項ノ旨趣ハ証テ現ニ得ル賍ヲ指稱スルモノト了解罷在候處客年七月當裁判所ニ於テ賍金ヲ以買取シタル物等ヲ沒收セリ然ルニ當時該事代理ハ之ヲ不當トシ被審者へ下付スヘキ趣意ヲ上告ス大審院ハ本年七月上告ノ如ク第四十八條ニ據リ裁決アリ右ハ凡ソ裁判例トナルヲ以テ之ニ倣フハ勿論ト雖大ニ疑團不少抑モ

金ハ品ニ變化スルモ猶間接ノ賍トシ品ハ金ト同視スルモノトセハ何度其種質ヲ變スルモ同ク源賍ト同視セサルヲ得ン爰ニ一例ヲ舉ニニ農甲吉備シ吉カ管品タル反物數拾ヲ盜ミ以農用牛馬數頭ヲ所有セハ之ヲ押收シテ乙吉ニ還付スヘシ然ルニ被審者タルモノノ常情ハ察ヨリ源賍ノ返還若クハ相當ノ要償ニ可有之右牛馬ヲ還付セラル、如キハ迷惑僅少ナラサレハ之ヲ辭退センニ判官ハ已ニ押收還付ノ宣告ヲナシタルハ如何ニスヘカラス其他官ヘカラサル障害アルニ至ラン右ハ法理上甚ク了解難候間伺分ノ御訓示ヲ仰キ候也

内訓 十六年十一月二日

請訓ノ趣賍金ヲ以テ買取シタル物品ハ勿論賍物ト交換シタル物品ト雖モ仍小賍物トシテ處分ス可キモノトス但還付ノ處分ヲ受ケルモ被害者ニ於テ其物品ヲ領收セスシテ別ニ損害ノ賠償ヲ求ムルハ其隨意ナリトス此旨及内訓候也

●大分輕罪裁判所檢察事ヨリ罪ヲ免カル、爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分方司法省へ

請訓 十六年十一月五日

茲ニ庖丁ヲ携帶シ人ノ邸内ニ設ケアル米搗水車場へ忍入り米ヲ竊取セントスル際看守者ニ覺知セラレ看守者ヨリ捕リ抑ヘラレタルニ極リ免カル、爲メ携帶シ居ル庖丁ヲ以テ看守者ノ兩手ニ疵ヲ負ハセ終ニ死ニ致シタル者アリ右ハ故殺スルノ意アツテ傷ヲ負ハセタルニ非ス捕リ抑ヘラレタル故免カル、爲メ傷ヲ負ハセタリト陳述スルモ之ヲ證明スル能ハサル以上ハ故殺シタル者トシ刑法第二百九十六條ニ照フヘキモノナルヤ將夕同法第三百三條ニ照フヘキモノナルヤ此段御内訓候也

内訓 十六年十一月五日

犯罪ヲ免カル、爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分ノ件請訓ノ趣右ハ故殺ノ証憑ハ原等官ヨリ之ヲ舉示セサル可カラズ若シ其証憑ナキハ刑法第三百三條ニ依リ處分ス可キ者トス此旨及内訓候也

●官林看守者其職務ニ付テノ犯罪處分等ノ儀ニ付長崎縣ヨリ司法省へ伺 十六年十一月二十日

第一條 刑部員犯罪處分ノ後ニ付本年十月第四八二五號ヲ以テ御内訓ノ次第有之右ハ戶長役場筆生ノミナラス一般職員ト雖モ官吏ノ行フヘキ職務ニ付テノ犯罪及ヒ他人ノ其職務ニ對シタル犯罪ハ總テ官吏ト同ク處分スヘキモノニ可有之依テハ官林看守人ノ如キモ其山林ノ竹木ヲ竊取シタルハ刑法第二百八十九條ニ依リ處分シ又其職務執行中即チ官林監視ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ看守人ニ抗拒シ或ハ其目前ニ於テ侮辱シタル者ハ刑法第三章第二節ノ各條ニ依リ處分スヘキ哉

第二條 一般職員並官林看守人等官吏ノ職務ニ際シテ看守人ハ官林ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知又ハ思料シタル時之ヲ告發スルニハ治罪法第九十六條ニ依ルヘキモノニ候哉

指令 十六年十二月廿日

第一條 官林監視ノ如キハ官吏ノ行フヘキ職務ト爲サ、ルニ依リ監守人職務ニ付テノ犯罪及職務ニ對スル犯罪ハ官吏ト同視シテ處分スルヲ得ス

第二條 一般ノ職員ハ官吏ノ職務ヲ行フ場合ニ限リ何之通其他職務ヲ行フニ際シ重罪輕罪アルヲ認見セシ時ハ當然告發ノ責任ハアルヘシト雖モ治罪法第九十六條ニ依ルヘキ者ニ非ス山林監守人ニ付テモ亦同シ

● 刑期計算方之儀ニ付茨城縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年十一月十二日

刑ノ官渡ヲ受ケタル者上告ヲナシ上告者ノ主意相立サルモ大審院於テ原裁判ノ幾分ヲ破棄セラレタル節ハ原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀トハ思料候得共其判決ニ服セス哀訴ヲナシ棄却セラレタル節モ亦原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算シ可然哉此假相候也

指令 十六年十二月廿一日

何之趣原裁判宣告ノ日ヨリ起算ス可シト雖モ大審院ニ於テ破毀ノ官渡アリタル翌日ヨリ哀訴棄却ノ官渡迄ノ日數ハ除去スル儀ト心得可シ

● 刑名宣告書謄本ノ儀ニ付福岡縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年十二月十一日

刑法附則第二十三條犯人ヲ警署ニ送送スルハ刑名宣告書ノ謄本ヲ附スヘシトアルヲ以テ是迄裁判所ヨリ送附シタル刑名宣告書ノ謄本ハ監獄署ニ止メ置キ之ヲ謄寫シテ警署ヘ送附シ來リ候所監視ハ監獄署ニ於テ謄寫シタル宣告書ヲ以テ執行スルハ適當ナラサル様思考シ少シク疑惑ヲ生シ相候候係至急何分ノ仰御指揮候也

指令 十六年十二月廿九日

何ノ趣監視執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲ス可シ但監獄署ニ於テハ之ヲ謄寫シテ止メ置ク儀ト心得可シ

● 神戸始審裁判所檢事ヨリ強盜共犯者ヲ傷シタル者處分方ノ儀ニ付司法省ヘ請訓 十六年十月廿日

茲ニ甲乙丙者共謀シテ丁者ノ家ニ侵入シ脅迫シテ財ヲ奪ヒ去ラントスルニ際シ追捕者ト認認シ甲者丙者ヲ傷シタリ而シテ斯ク人ヲ傷スルノ原因ヲ探究スルニ若シ追捕スルモノアル時ハ殺死セントスルヤ既ニ犯前五ニ共謀シタルモノナリ

此場合ニ於テ甲乙丙者共ニ強盜人ヲ傷スルモノトシ論ス可キヤ又ハ甲乙者ノミ強盜人ヲ傷スルノ共犯トシ負傷シタル丙者ハ單ニ強盜罪ヲ以テ論シ可然哉又ハ共犯ナルモノハ合體一人ト見做スヲ以テ單ニ自己ノ身体ニ傷ケ候モノト同一ナルヲ以テ甲乙丙者共單ニ強盜罪ノミ論シ可然哉處分上聊疑義ヲ生シ候間仰内訓候係至急何分ノ御指揮有之度候也

内訓 十七年一月八日

請訓ノ趣中殿見解ノ通此旨及内訓候也

● 監視之儀ニ付滋賀縣ヨリ内務省ヘ伺 十六年九月廿五日

通常監視ニ付セラレタル者ニシテ他管下ヘ旅行且ツ滞在スル節取締方之儀ハ刑法附則第二章中ニ明文モアリ且本縣ヨリ伺定置候次第モ有之候得共在居地管内旅行ニ就テハ別ニ取締方法無之然ルニ力役等ヲ以テ物口ヲ爲スモノ、如キハ其業体ノ都合ニ依リ在居地町村邊寄ニ於テ其職業ニ従事スルヲ得ス數里外ナル他ノ警署管下ヘ數十日出稼ス

ルモノアリ右等ノ者ニ至テハ毎月兩度居住地ノ所轄警察署へ謹慎ヲ要スル爲メ出頭スルハ時日ヲ費シ糊口上ニ困難
スル趣ヲ以テ出稼地ノ所轄警察署又ハ分署へ出頭謹慎ヲ要シ度旨出願スルモノアリ右ハ事實憫然ノ至リニ付之ヲ許
可シ其旨出稼先キノ所轄警察署又ハ分署へ通牒監視致シ候モ御差支之筋無之候哉相伺候也

指令 十七年一月九日
伺之趣事情無異者ニ限リ許可シ不苦儀ト可心得事
●賭博犯ニ關スル偽証者處分方ノ儀ニ付新潟縣ヨリ司法省へ伺(電) 十七年一月十一日

賭博犯ニ關スル証人偽証及ヒ隱匿者ハ無論刑法ニ依リ處分相成儀ト心得可然哉

指令 十七年一月十五日
水月十一日附電報伺ノ趣ハ刑法ニ依ルノ限ニアラス

●已決囚刑期計算之儀ニ付新潟縣ヨリ司法省へ伺 十六年十二月廿五日

第一條 舊刑法處罰ノ者ニシテ改定律例第五十條ニ依リ償役アル者現今服役中ニ在ル者ハ新刑法ニ比準シ其償役ヲ
有メ原役限内ニ算入シ可然哉

第二條 前條ノ者改定律例第四十四條ニ依リ償役アル者現今服役中ニ在ル者ハ前條同様處分シテ可然哉

指令 十七年一月十九日
第一條第二條 伺ノ趣

●囚徒遺体式葬之儀ニ付德島縣ヨリ司法省へ伺 十六年十二月廿八日
刑期々限内ニ死亡シタル囚徒ノ親族等ヨリ其遺骸ヲ請フニ依リ之ヲ下付致シ候上ハ式ヲ以テ葬儀執行候共不苦儀ニ
候哉

指令 伺之趣 十七年一月十九日
●長崎控訴裁判所檢事ヨリ司法省へ監視規則之儀ニ付上申ノ要旨 十七年二月廿二日

監視規則中一月兩度所轄警察署ニ出頭セシムルヲアリ遊地人民ノ如キハ所轄警察署ヲ距ル或ハ十數里ノ遠キニ及ヒ
山ヲ躰エ海ヲ航シ日數三四日ヲ要セザレハ往復スル能ハサルモノアリ爲ニ犯則スルモノ比々有之候故ニ自今警察署
ナキ地ニ於テハ監視表ノ檢印ヲ戶長役場ニ受クルノ便ヲ與フルハ獨リ犯則者ヲ減スルノミナラス實地ノ取締モ亦
大ニ相立可申儀テ本規則御改正相成度此段及上申候也

内訓 十七年三月十八日
監視規則中改正ノ儀ニ付上申ノ趣檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又
ハ戶長役場ニ出頭シ檢印ヲ受ルモ妨ケナキ儀ト心得ヘレ

●監視ニ付スル犯人警察署へ護送ノ時刑名宣告書ノ謄本送付ノ儀ニ付茨城縣ヨリ司法
省へ伺 十七年三月五日

監視ニ付セラレタル犯人ヲ警察署ニ護送スル時當縣ニ於テハ是迄裁判所ヨリ送致ヲ受ケタル刑名宣告書ノ謄本ハ監
獄署ニ止メ置キ同署書記ヲシテ之ヲ復寫セシメ其謄本ヲ以テ執行致シ來候處昨十六年十二月二十八日福岡縣へノ御
指令ニ據レハ監視ノ執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲ス可シトアレ共犯ノ被告人數名
ニシテ其宣告書一通ナル時ハ各其住居ノ地ヲ異ニシ又刑期ノ長短アリテ之ヲ執行ヲ爲スニ際シ宣告書數通裁判所ヨ
リ送致ヲ受ケサルヲ得サル場合アルノミナラス主刑ノ終ルマテ數年間監視著ニ宣告書ノ謄本ヲ保存スルニ散亂ノ患
ナカラシメンガ爲メ辨冊ニ編纂ヲナサハルヲ得サルニ依リ裁判所ヨリ送致セラレタル宣告書ノ謄本ヲ警察署ニ送致
スルハ大ク不便ニシテ裁判所ト監視著ニ於テハ頗ル手數ヲ煩シ實際差支ノ筋不抄ヲ以テ當縣ニ於テハ從前ノ如ク監
獄署書記ヲシテ謄寫セシメ其謄本ニハ書記署名官印ヲ捺捺シ而シテ官署ノ印ヲ用ヒ之ヲ以テ監視ノ執行ヲ爲サシム
ルモ不苦儀哉

指令 十七年三月廿五日
伺ノ趣共犯人アル場合ニ限リ見込ノ通但共旨ヲ送致ス可キ謄本ニ記載ス可シ

●監視ニ付セラレタル者旅費欠乏ノ爲メ救護ニ係ル諸費支辨方新潟縣ヨリ内務省ヘ伺
十七年二月一日

監視ニ付セラレタル者刑罰附則第二十五條ノ場合ニ於テ途中發病等ノ爲メ滝澤中旅費欠乏シ其地ノ警察署ニ救護ヲ
乞フ者ハ刑罰附則第三十二條ニ準據シ所在地警察署ノ別府ニ留置スヘキ旨愛媛縣ヨリ司法卿ヘ伺出ケル指令ニ
報明百有之候處置獄署ニ送附ノ警察署ヘ右等ノ救護ヲ乞フ時ニ當リ監獄署ヘ押送ニ關スル費用ハ本籍ヨリ追償致ス
ヘキ者ト存候得共赤貧ニシテ償還スルノ道無之節ハ何レノ費目ヨリ可致支辨候哉
指令 十七年四月九日

伺之趣自家親戚引取人等總テ代償スル資力無之節ハ犯人本籍ノ地方稅救費中ヨリ償償セシムヘシ
●監視認印巡查交番所ニ於テ取扱ノ儀ニ付三重縣ヨリ司法省ヘ伺 十七年三月三十一日

交番所ニ於テ監視事務取扱ノ儀ニ付別紙寫第一條ノ通相伺朱書之通御指令有之候ニ付不得止警察署ノミニテ檢印爲
我居候處長崎縣裁判所檢事長ヨリ監視規則中ノ警察署ヲ司法警察官ト改正ノ上中ニ對シ檢印ヲ受クヘキ警察署往
復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又ハ戶長役場ニ出頭シ檢印ヲ受クルモ妨ケナキ旨御内訓相成候那
本年三月二十一日附第一四四一號ヲ以テ御省第四局副長ノ移牒ニ依リ致承知候右ハ郡戶長ハ司法警察官ト謂フノ故
ヲ以テ斯ク御内訓相成候義ト相考ヘ候果シテ然ラハ當縣交番所ノ如キモ常ニ警部代理ヲ命シタル巡查即チ司法警察
官ノ事務ヲ取扱フ巡查有之且ツ實際上ノ状況伺同ニ具載スル通ニ付右御内訓郡役所戶長役場同様交番所ニ於テモ檢
印爲致度此段重テ相伺候條何分ノ御指令有之度候也
指令 十七年四月二十一日

刑罰附則第二十七條第一ノ場合ニテ所轄警察署マテノ距離往復一泊以上ヲ要スル時ハ伺ノ通

別紙

刑罰附則ノ儀ニ付伺

第一條 刑罰附則第二章中ニ散見スル警察所トハ警察署及其分署ヲ指稱シタルモノトハ存候得共常縣ノ如キハ

該署部内延長十餘里ニ涉ルノ箇所往々有之被監者ハ處刑人ナリトハ乍申毎月警察署ヘ往復スル因却不尠殊ニ
其往復者ノ如キニ至テハ右往復スル時間ハ家業ヲ休止スルヲ以テ生計ニ害間候而已ナラス又路費モ無之遠ニ
不參スル者可有之然ルニ該署部内ニハ數箇ノ巡查交番所ヲ配置シ必ス第一等巡查ヲ派遣シテ警部代理トナシ
之ニ巡查數名ヲ附屬セシムルヲ以テ名ハ交番所ナリト雖モ其實ハ隣府縣ノ分署ニ異ナラス故ヲ以テ便宜ニ從
ト右交番所ニテ前所屬警察署同様監視ノ事務爲取扱候モ妨ケ無之哉

第二條 略ス

右相伺候條何分ノ御指令相成度候也

明治十五年八月廿三日

三重縣令岩村定高

司法卿大木喬任殿

朱書

伺之趣左ノ通心得ヘシ

第一條 交番所ニ於テ監視ノ事務ヲ取扱ハシムルヲ得ス

第二條 略ス

明治十五年十月廿六日

●岡山始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ子孫父祖ニ對スル偽證書ノ儀ニ付請訓 十七年四月十
刑罰第二編第四章第四節中別ニ親屬ニ係ル不倫罪ノ特別無之ニ付假令其祖父ヲ欺瞞シテ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的
ノミニ出タル偽印證書ノ所爲ト雖モ猶且之ヲ罰スヘキノ旨意ナルヤ抑偽印偽證書ノ所爲タルヤ容取詐取ノ如キ特ニ
父子間ノミニ直接スルノ類ニ異ナリ之ヲ他人ニ公示シ之ヲ庇廷ニ提出スレハ則社會ニ公使シタルモノナルヲ以テ即
チ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカラス且父祖モ亦社會ノ一部ニ屬スルヲ以テ假令父祖ノミニ信用ヲ害スル

第十七類 刑法

ニ於テモ亦以テ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカヲサルノ理アリ況ヤ之ヲ公衆ニ公使スルヲヤ故ニ本案一ハ信用ヲ害スル罪ニシテ一ハ財産ニ對スルノ罪ナルニ付其所爲自カラニ罪ニ判カレ彼此立法ノ主義相異ナルヲ以テ詐欺取財ノ罪ハ之ヲ間ハサルモ偽印偽證書ノ罪ハ猶之ヲ罰スヘキ所以ナル乎

或ハ本節ハ偽造印ノ條ニ異ナリ其起因タル偽造ノミヲ以テハ之ヲ罰セス必其結果タル使用行使ヲ合スルニアラサレハ罰トナラサルモノニシテ而シテ其結果タル使用行使ハ即チ刑法之ヲ間ハサルノ詐欺取財ニ係ルヲ以テ元來其罪ノ成リ立ツヘキ因果ノ結合セサルモノニ付父祖ノ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽印偽證書ニシテ敢テ他人ヲ害スルニアラサル以上ハ之ヲ罰スルノ限ニアラサル乎本案疑義ノ事實ハ左ノ如シ

茲ニ甲乙丙ノ三人アリ乙ハ甲ノ養子ニシテ丙ハ其朋友ナリ乙放蕩ニシテ品行修ラス自カラ養家ノ意ニ適セス早晚必離絶セラルヘキヲ知リ之カ準備ヲナサント欲シ竊ニ甲ノ印影ヲ盜用シ以テ甲カ丙ヨリ金若干圓借用シタル證書ヲ偽造シ丙ニ其情ヲ告ケ申成ルノ後ハ該金ノ幾分ヲ與フヘキヲ約シ丙ヲシテ之ヲ出脈セシメタリ於是乙其引合人トシテ出廷シ該證書ハ甲ノ囑ニ因テ之ヲ代書シ其金圓ハ即チ甲ノ借用シタルニ相違ナキ旨證狀シ遂ニ甲ノ敗訴トナリタリ甲其裁判ニ服セス未タ執行セサルニ際シ會々其罪發覺ニ及ヒ申亦之ヲ告訴シタリ如此キ場合ニ於テ乙ヲ處スル如何ノ疑團ニ係ルモノナリ

右疑義仰内訓候也

内訓 十七年五月十四日
子孫父祖ノ借用證書ヲ偽造シ金圓ヲ詐取セントシタル者處分ノ儀ニ付請訓ノ趣右ハ第二項見解ノ通此旨及内訓候也

●醫師公務ニ關セサル詐僞ノ疾病證書ヲ造ル者ノ儀ニ付山形始審裁判所酒田支廳檢事ヨリ司法省ヘ伺 十七年六月廿八日

造リタル者ハ公務ヲ免ル可キタメノ一元蓋ナキカ故ニ刑法第貳百拾五條ノ犯罪ニ非サル可シ然レモ不應爲ノ事タルハ勿論爲ニ警ヲ生スルモノナレハ刑法第貳百拾條貳項ノ犯罪ニシテ該條ニ依リ處ス可キモノニ候哉

内訓 十七年七月三十日
別紙伺ノ趣ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

●刑期計算方ノ儀ニ付和歌山輕罪裁判所檢事ヨリ司法省ヘ請訓 十七年七月十七日

刑ノ旨渡ニ對シ被告人自ラ上告シ檢察官亦附帶ノ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ二個ノ上告共ニ棄却セラレタルハ刑法第拾壹條第壹項ノ後段ニ依リ後判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト存候得共同上ノ場合ニ於テ被告人ノ上告旨趣ハ原裁判ヲ破毀スルノ理由ト爲スニ足ラサルモ他ニ不法ノ點アルヲ以テ大審院之ヲ破毀シタルハ又檢察官附帶上告ノ旨趣ニ依リ原裁判ヲ破毀シタルハ到底原裁判不法ナリシモノニ付被告人ノ之ニ服セスシテ上告セシハ不當ナリト爲シカク且原裁判ノ破毀ト爲リタルハ畢竟被告人ノ上告ニ因ルヲ以テ此二個ノ場合ニ於テハ刑法第拾壹條第壹項ノ前段ニ依リ前判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト相心得可然哉

内訓 十七年七月三十日
別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及内訓候也

●輕罪ノ刑ヨリ減等シテ拘留ニ處セラレタルモノ、件ニ付岐阜始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ請訓 十七年十月一日

刑法第拾壹條刑ハ裁判確定ノ後ニアラサレハ之ヲ執行スルヲ得ストアリテ總テ刑ノ執行ハ上訴期限經過ノ後執行スヘキモノナルモ違背罪ノ如キハ明治十四年第四拾四號公布ニ依リ上訴ヲ許サレサルモノナレハ裁判宣告ハ即日ヨリ執行スヘキモノナラン候ヲ思考スルニ茲ニ輕罪犯ニシテ宥懲減輕酌量減輕等ニテ禁錮ヲ減盡シ拘留ニ處セラレタルモノハ勿論縱令減シテ其長期一月以上ニ在ルモ其短期十日以下トナリ其短期ヲ以テ拘留ニ處セラレタルモノハ其現ニ受ケヘキ刑ハ即チ違背罪ノ刑ナレハ該第四拾四號ノ公布ニ基キ上訴ヲ許サレサルモノトシ裁判宣告ノ即日ヨリ

ニ於テモ亦以テ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカサルノ理アリ況ヤ之ヲ公衆ニ公使スルヲヤ故ニ本案一ハ借用ヲ害スル罪ニシテ一ハ財産ニ對スルノ罪ナルニ付其所爲自カラニ罪ニ判カレ彼此立法ノ主義相異ナルヲ以テ詐欺取財ノ罪ハ之ヲ問ハサルモ偽印偽證書ノ罪ハ猶之ヲ罰スヘキ所以ナル乎

成ハ本節ハ偽造管印ノ條ニ異ナリ其起因タル偽造ノミヲ以テハ之ヲ罰セス必其結果タル使用行使ヲ合スルニアラサレハ罰トナラサルモノニシテ而シテ其結果タル使用行使ハ即チ刑法之ヲ問ハサルノ詐欺取財ニ係ルヲ以テ元來其罪ノ成リ立ツヘキ因果ノ結合セサルモノニ付父祖ノ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽印偽證書ニシテ敢テ他人ヲ害スルニアラサル以上ハ之ヲ罰スルノ限ニアラサル乎本案疑義ノ事實ハ左ノ如シ

茲ニ甲乙丙ノ三人アリ乙ハ甲ノ養子ニシテ丙ハ其朋友ナリ乙放蕩ニシテ品行修ラス自カラ養家ノ意ニ適セス早晚必離絶セラルヘキヲ知リ之方準備ヲナサント欲シ竊ニ甲ノ印影ヲ盜用シ以テ甲カ丙ヨリ金若干圓借用シタル證書ヲ偽造シ丙ニ其情ヲ告ケ事成ルノ後ハ該金ノ幾分ヲ取フヘキヲ約シ丙ヲシテ之ヲ出所セシメタリ於是乙其引合人トシテ出廷シ該證書ハ甲ノ囑ニ因テ之ヲ代書シ其金圓ハ即チ甲ノ借用シタルニ相違ナキ旨證據シ遂ニ甲ノ敗訴トナリ甲其裁判ニ服セス未タ執行セサルニ際シ會シ其罪發覺ニ及ヒ甲亦之ヲ告所シタリ如此キ場合ニ於テ乙ヲ處スル如何ノ疑團ニ係ルモノナリ

右疑義仰内訓候也

内訓 十七年五月十四日

子孫父祖ノ借用證書ヲ偽造シ金圓ヲ詐取セントシタル者處分ノ儀ニ付請訓ノ趣右ハ第二項見解ノ通此旨及内訓候也

醫師公務ニ關セサル詐僞ノ疾病證書ヲ造ル者ノ儀ニ付山形始審裁判所酒田支廳檢事

ヨリ司法省へ伺 十七年六月廿八日

戸主ヲ騙スルカケメ又ハ被告人召喚ノ際或ハ保釋中呼出ノ節又ハ其他ノ事ニ因リ醫師囑託ヲ受ケ詐僞ノ疾病證書ヲ

造リタル者ハ公務ヲ免ル可キケメノ一元罰ナキカ故ニ刑法第貳百拾五條ノ犯罪ニ非サル可シ然レモ不應爲ノ事タルハ勿論爲ニ得ズ生スルモノナレハ刑法第貳百拾條貳項ノ犯罪ニシテ該條ニ依リ處ス可キモノニ候哉

内訓 十七年七月三十日

別紙伺ノ趣ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

刑期計算方ノ儀ニ付和歌山輕罪裁判所檢事ヨリ司法省へ請訓 十七年七月十七日

刑ノ旨渡ニ對シ被告人自ラ上告シ檢察官亦附帶ノ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ二個ノ上告共ニ棄却セラレタルトハ刑法第百拾條條第壹ノ後段ニ依リ後判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト存候得共同上ノ場合ニ於テ被告人ノ上告旨趣ハ原裁判ヲ破毀スルノ理由ト爲スニ足ラサルモ他ニ不法ノ點アルヲ以テ大審院之ヲ破毀シタルトハ又檢察官附帶上告ノ旨趣ニ依リ原裁判ヲ破毀シタルトハ到底原裁判不法ナリシモノニ付被告人ノ之ニ服セスシテ上告セシハ不當ナリト爲シカタク且原裁判ノ破毀ト爲リタルハ畢竟被告人ノ上告ニ因ルヲ以テ此二個ノ場合ニ於テハ刑法第百拾條條第壹ノ前段ニ依リ前判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト相心得可然哉

内訓 十七年七月三十日

別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及内訓候也

輕罪ノ刑ヨリ減等シテ拘留ニ處セラレタルモノ、件ニ付岐阜始審裁判所檢事ヨリ司法省へ請訓 十七年十月一日

刑法第百拾條刑ハ裁判確定ノ後ニアラサレハ之ヲ執行スルヲ得ストアリテ總テ刑ノ執行ハ上訴期限經過ノ後執行スヘキモノナルモ違背罪ノ如キハ明治十四年第四拾四號公布ニ依リ上訴ヲ許サレサルモノナレハ裁判宣告ハ即日ヨリ執行スヘキモノナラン候ヲ思考スルニ茲ニ輕罪犯ニシテ宥恕減輕酌量減輕等ニテ禁錮ヲ減盡シ拘留ニ處セラレタルモノハ勿論綜合減シテ其長期一月以上ニ在ルモ其短期十日以下トナリ其短期ヲ以テ拘留ニ處セラレタルモノハ其現ニ受ケヘキ刑ハ即チ違背罪ノ刑ナレハ該第四拾四號ノ公布ニ基キ上訴ヲ許サレサルモノトシ裁判宣告ノ即日ヨリ

執行スヘキモノト心得可然哉御内訓候也

内訓 十七年十月十八日

請訓之趣禁錮ヲ減シテ拘留ニ處セラレタル者ト雖モ尙ホ上訴スルヲ得ルヲ以テ上訴期限經過ノ後ニアラサレハ其刑ヲ執行スルヲ得サル儀ト心得可シ此旨及内訓候也

十七年十月二十一日

●舊法受刑ノ者刑期計算ノ儀ニ付大分縣ヨリ司法省ヘ伺

本年八月御省第三八一〇號内訓千葉縣何第壹條ニ訓シ云々御指令有之候處茲ニ明治四年七月廿一日明治十年ノ旨渡ヲ受ケ處刑中逃走外ニ在テ又犯罪ニ依リ全六年十二月十七日從新拘役十年加役七十日ノ處刑中全十年四月二日再ヒ逃走セシニ依リ續續二日ノ上懲役終身ニ處セラレ服役中全囚ノ逃走ヲ報シタルニ依リ減一節懲役十年トナリタル者アリ右ハ千葉縣何下事情相違ノ廉モ有之候ヘ正矢該縣内訓ニ基キ刑法第五拾貳條ニ從ヒ逃走禁錮等ノ日數ヲ除キ最前受刑ノ日 明治四年七月廿一日 二測リ已ニ役過セシ日數四年三百拾九日 自明治四年七月廿一日至全六年二月十八日 日數三年百六日合テ懲役十年ノ内ヨリ扣除シ刑期ヲ計算致可然哉

指令 十七年十一月二十日

伺ノ趣明治十年四月二日即チ懲役終身ノ宣告アリタル日ヨリ刑期ヲ起算スル儀ト心得可シ

●刑期計算之儀岐阜縣ヨリ司法省ヘ伺

十七年十二月五日

第壹條 甲地裁判所ニ於テ缺席裁判ヲ受ケシ地ニテ他ノ被告事件ニテ捕縛入監シタルモノ其事件收罪價例例ニ依リ不論罪等ノ旨渡ヲ受ケタルモノアリ右刑期計算方ハ假令他ノ事件ニテ捕縛入監中缺席裁判アリタルト知リタル場合ト雖モ明治十五年九月廿日水縣監第五拾貳號何御指令ニ依リ逮捕ノ日ヲ以テ該缺席裁判ノ刑期ヲ起算可然哉

第貳條 缺席裁判アリタルト不知全ク往時ノ罪科ヲ悔ヒ自首入監中右缺席裁判アリタルト知リタル時モ猶第壹條ノ通相心得可然哉

第參條 治罪法第四百拾條但書ニ捕ニ就キタル時八十日內ニ故歐ヲ爲スヘシトアルハ是レ單ニ本案事件ヲ指シタル

場合ニテ他ノ事件ニテ入監中當然定期ノ期限ヲ經過スルト雖モ缺席裁判官渡アリタルト知リタルヨリ十日ノ期限ヲ與フヘキモノカ

指令 十八年一月二十四日

第壹條 第二條 何之通

第參條 本按事件ノ爲メ捕ニ就キタル場合ト否トニ拘ハラス缺席裁判アリタルト知リタルヨリ十日ノ期限ヲ與フ可シ但何書ニ治罪法第四百拾條トアルハ第四百七條ノ限寫ナル可シ

●縣ノ布達ニ違背スル者處分方ノ儀ニ付滋賀縣ヨリ司法省ヘ伺

十六年十一月九日

本縣限リ制定スル布達施行期限ハ是迄刑ニ相定メス總テ大政官布告施行期限ニ準シ來候處本年大政官第拾七號公布ヲ以テ布告布達施行期限制定セラレ候ニ付テハ爾來本縣限リ定ムル處ノ布達ニシテ 假ハハ地方限リノ違背罪目ニシテ特ニ施行期日ノ配シ無之分之ニ違背スルモノハ尙ホ從前ノ慣例ニ依リ右第拾七號公布第壹條ニ準シ殺令ノ日ヨリ七日ヲ過キタルハ相當處罰致シ可然哉

指令 何之通 十六年十一月廿八日

●沿革要領

明治元年正月廿三日布告ヲ以テ暗殺ヲ嚴禁シ犯ス者ハ嚴科ニ處ヌ○同年四月布告ヲ以テ阿片

告ヲ以テ廢造金銀貨ヲ行使スル者ハ嚴科ニ處セシム○三年七月二日偽造貨貨律ヲ定ム○同年八月九日販賣鴉片烟律ヲ定ム○同年十一月十八日准流法ヲ設ケ今後流罪ヲ犯ス者處分方ヲ定ム○同年十二月二十日新律綱領六卷ヲ頒布ス○六年六月第二百六號布告ヲ以テ改定律例ヲ頒布ス○十三年七月第三十六號布告ヲ以テ刑法ヲ改定ス

第十八類 治罪法

〔第百八十三〕 治罪法ヲ制定ス 明治十三年七月十七日
第三拾七號布告

治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事 十四年第三拾六號ヲ以テ十五年
一月一日ヨリ實施ノ旨ヲ布告ス

治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第一節 告訴及ヒ告發

第十八類 治罪法

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 證據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢證及ヒ物件差押

第六節 證人訊問

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第九節 保釋

第十節 豫審終結

第四章 豫審上訴

第四編 公判

第一章 通則

第二章 違警罪公判

第三章 輕罪公判

第四章 重罪公判

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第二章 再審ノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復權

第三章 特赦

治罪法

第一編 總則

第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ヌ又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ヌ但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スコトヲ許サル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ供ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要

▲ルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和
三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五六赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時

ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失

ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

十五年第七號
布告發令(第
百八十三ノ十
三項)

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルコトヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

十四年第四十六號布告參看
〔次項〕

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ
第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ搜查ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

十四年第五十六號及第五十七號(第百六十九項)十五年第三十六號(第百八十三項)第十三年第十一號(第百四十一項)第十一年第十七號(第百三十七項)

十四年第四十六號(第百六十九項)

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場合ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第十八類 治罪法

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上逮捕スルコトヲ許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

關席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ關席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

十四年第六十五號布告參看
〔第八十三ノ八項〕

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコトヲ得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿

十四年第五十四號布告參看
〔第八十三ノ三項〕

一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜

査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第二編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法

警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

十五年滿廿三
號布告(第百
八十三)ノ十五
項(十四)年可
法省甲第五號
布達參看(同
州一項)

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取

調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受ク

ルヲアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ

差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之

ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但

其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命

ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判所長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトアル可シ
檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス
第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ
事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開
廳スルコトヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

十五年第三十號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第三十四號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第三十六號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第三十九號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十一號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十二號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十三號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十四號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十五號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十六號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十七號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十八號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第四十九號布告(第四百八十三ノ三十四項)同第五十號布告(第四百八十三ノ三十四項)

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ
始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ
事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

十四年第四十號布告(第四百八十三ノ一)同第四十一號布告(第四百八十三ノ一)同第四十二號布告(第四百八十三ノ一)同第四十三號布告(第四百八十三ノ一)同第四十四號布告(第四百八十三ノ一)同第四十五號布告(第四百八十三ノ一)同第四十六號布告(第四百八十三ノ一)同第四十七號布告(第四百八十三ノ一)同第四十八號布告(第四百八十三ノ一)同第四十九號布告(第四百八十三ノ一)同第五十號布告(第四百八十三ノ一)

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開

院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議員大審院判事ニヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命

ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

十六年第四十
九號布告參看
〔第八十三
ノ廿一項〕

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行

フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スル

ヲ得

一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可

シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヲ認知

シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第七條以下ノ規則ニ從ヒ起

訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十二條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第四百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第四百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ
又告訴人ハ第四百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルコトヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

十四年司法省
丙第十六號
第四百八十五
三ノ三十五
項

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第四百十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラズ

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス
一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時
三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

十四年第七十
三號布告參看
第四百八十三
ノ十一項

十四年第四十
六號布告參看
〔次項〕

第二百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ
違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

同上

第二百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第二百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第二百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第二百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ
被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二百七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

- 一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ
- 二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ
- 三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ
- 四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第二百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第二百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第一百十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ
豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス
豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得
又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコトヲ得

第一百十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スコトヲ得
被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第一百十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第一百十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告訴ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事

件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第一百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ
若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サハル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第一百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ
若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

第一百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ
又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第一百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

十四年司法省
丁第二十八號
達ヲ以テ令狀
様式ヲ定ムルハ
第三百八十三ノ
三十七項

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
一被告人定リタル住所アラサル時
二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾引狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

十四年第五十
九號布告(第
百八十三ノ七
項)同年司法
省第四號達
參照同四
一(項)

第百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キコトヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キコトヲ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第百二十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ賣付ス可シ

第百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概要
 二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
 三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ
 又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ
 勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルヲアル可シ
 前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ
 巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

十五年四月
 丙第六號達
 第四百八十三
 丁第十三項同
 第五項同四十

シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス

第百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知り又ハ潛匿シタルト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得
 巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得
 請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヲ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヲ得
 何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第三百二十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルヲ言渡ヲ爲スヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナシ被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

十六年第八號
布告參照(第
百八十三ノ十
八項)

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付
キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラ
ス

第四百十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スル
ヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第四百十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條
ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第四百十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第四百十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模
樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシム
ルコトヲ得

第四百十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其
對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第四百五十一條 第四百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第四百五十六條 被告人又ハ對質人雙ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシ

△若シ雙者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第四百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第四百九十二條 第四百九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第四百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證
ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第四百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ
模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第四百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ
人違ナキコト又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ
目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第六十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會シハムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラズ

第六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ハタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第六十七條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社

ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料

十四年第四十
六號(大項)十
五年司法省丙
第三十四號達
參看(第四百八
十三ノ五十六
項)

シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出ス可シ得

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル

同上

時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

一民事原告人

二民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未滿ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘡啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ

付キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ他ノ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得

若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第八十六條 第五十六條第五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲サハルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得
本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス
第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

十五年即法省
丙第二十五號
鑑定人ノ旅費
ノ日當立換サ
ル旨ヲ示ス
看(第百八十
三ノ五十三項

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ
第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ
第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ得可シ
外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置シ得可シ

同上

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得
豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルコトヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス
證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

十四年第四十六號布告參看

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得ス

十五年第五十三號布告參看
第六百八十三ノ十七項

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ
若シ起訴ヲ爲スコカラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

同上

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意

第十八類 治罪法

十六年司法省
丙第八號達ヲ

以テ保釋費付
ノ被告人取
方ヲ示ス
〔第六十二項〕
ノ六十二項

見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百一十條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百一十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百一十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第二百一十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百一十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百一十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百一十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百一十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百一十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラヌト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハヌ後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ
 若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件
 ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時
 ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
 一 犯罪ノ證據充分ナラサル時
 二 被告事件罪ト爲ラサル時
 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 四 確定裁判ヲ經タル時
 五六赦アリタル時
 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ
 且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ
 被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ
 爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ
 若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所
 ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコトヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ
 管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ明
 示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯
 罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ
 充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス
 可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル

可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告
人ハ現ニ拘留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲ス可ヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キ
トテ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告
ス可シ
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故
障ヲ爲ス可ヲ得

- 一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
- 二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
- 三 法律ニ背キ保釋費付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時
- 四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲ス可ヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ際本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出

ス可ヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋費付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリ
タル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟
書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲
ス可ヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫
審判事ヲ忌避スル可ヲ得

- 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
- 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
- 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト
雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ
書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立
ヲ認可シ又ハ棄却スル可ヲ得趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送

速ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得
會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリ
タル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得但豫
審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可
キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判
事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避
スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ス若シ自ラ回避

ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルコトヲ得
檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否

ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所
ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ

非サレハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス
第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲
スコトヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯
書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋實付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百二十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋實付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スコトヲ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告

十五年法律省
丙第十八號
參照(第百八
十三ノ四十八
項)

八ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナカル可シ

第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免許ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代官中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルコトヲ得

シメ若クハ勾留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得
若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後漸ニ辯論ヲ爲スコシ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スコシ但五日間辯論ヲ停止シ

又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲スコシ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲スコカラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲スコキノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達スヘシ

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラヌ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ証人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラヌ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス
若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハヌ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タヌ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百二十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルコトヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヘル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又陳述前辯論ニ立會フ可カラヌ

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルコトヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スコトヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルコト能ハカリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サハル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第二百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス
檢察官其他訴訟關係人ハ逃ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルコトヲ得又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス
第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ

幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主

ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁

判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上

訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差

出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ

於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變

災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ

差出スコトヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可

キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ

規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ

爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲

ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載

ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但

十四年四月
甲第七號及丁

第三十一號
第三百八十三
ノ三十三及三
十六項十五
年同法省內第
十二號同第
四十五項

上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又關席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルト又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルト及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルト若シ宣誓ヲ爲サハル時ハ其事由

四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルト後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルト是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルト

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルト記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ヲシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ二日内ニ之ヲ整理シ裁判長及ヒ書記署名捺印スヘシ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ
第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ
上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サハル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

十八年第三十
一號布告ヲ以
テ違警罪即決
例ヲ定ム參看
第三百八十三
ノ廿五項

第二百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スコトヲ得

第二百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第二百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第二百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第二百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルコトヲ得
若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第二百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第二百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ
民事原告人出廷セサル時亦同シ

第二百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第二百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルコト及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第二百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第二百二十六條ヨリ第二百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ關聯シタル者ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第三百二十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所

檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第三百二十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額

ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤

又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其

申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又關聯裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人

又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スコトヲ得

但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルコトヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述

シタル證人ヲ呼出スコトヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ

之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ

爲スコトヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得可キ旨

ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル

後被告事件ヲ陳述ス可シ
民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物
件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スコトヲ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ關席裁判ヲ

爲スコトヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 關席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章

ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 關席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外

刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スコトヲ得

一 被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルコト